
人造魔王プロキオン

樽リンメイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人造魔王プロキオン

【Nコード】

N0669H

【作者名】

檣リンメイ

【あらすじ】

魔法使いの少女、ポラリスが召還した少年。一見、普通の少年に見えたが、その正体は強大な力を持つ戦闘ロボット、プロキオンであった。ポラリスはプロキオンを魔王にして、世界の破滅と再生を計画する。

第一章（前書き）

ヒーローものが好きです。

しかし、なんの工夫もないのはつまらない。

そこで、「ヒーローと戦う悪の組織」の側を主人公として、小説を書いてみることにしました。

第一章

エピソード0

魔王召還の魔方陣は描き終えた。

「万物を狩りつくす白銀の狩人とその僕たる白銀の猟犬よ。私の声を聞け」

少女は手にした杖に精神を集中させ、そして呪文を唱えはじめる。少女の耳に、自分の心臓の音が響いた。額を流れる汗が目に入りしみる。知らず知らずのうちに、呼吸は早くなっていく。

当然だろう。

わずか十四歳の身で、『魔王』をこの世に呼び出そうとしているのだから。

「私の声を聞き、私の願いをかなえよ。この世界と汝が世界を隔てる門をこじ開けよ。この大地に立て。そして」

いよいよ呪文は終盤を迎える。彼女の鼓動が、息が、さらに早くなる。

「この大地を割れ、この大地を崩せ、この大地を」

「滅ぼせ」

彼女が言い終えた瞬間、目の前に奇妙な光が溢れだした。眩しいほどの光だったが、同時に目の前が真っ暗になった。眩しすぎて目がくらんだのかと思ったが、そうではないことはすぐにわかった。

光が黒かったのだ。

眩しいのに、目の前が真っ暗で何も見えない奇妙な『光』。

まるで、『闇』であるかのような『光』。

その奇妙な『光』の中に、彼女の目は動くものをとらえた。それは『光』の中心からまるで湧き出すように出てくる。そして、それ

は明らかに人の形をしていた。

彼女の中で嬉しさと不安、そして恐怖が交差した。自分の魔法が成功した歓び。そして、もう後戻りできないという不安、呼び出してしまったものへの恐怖。

そんな彼女の気持ちにとらわれず、それは徐々に形をはっきりさせる。そして、それが完全に人の姿に形成されると同時に、黒い光は一瞬にして消滅した。奇妙な光にさらされた目は視力を一時的に失った。

やがて視界は徐々に回復し、彼女の瞳に呼び出したものの姿が映し出された。

「え？」

思わず、目を擦ってみた。なんども瞬きしてみた。だが目の前にいる者の姿は変わらない。

「あれが……魔王？」

魔王。

その言葉のもつ響きとは、あまりにもかけ離れた姿がそこにあった。

黒髪の少年の姿が。

少年は、目を大きく見開き、呆然とした様子でその場に突っ立っている。

「あなた、魔王？」

だが、外見だけで判断するわけにもいかない。相手はなにしろ魔王なのだから。

彼女は目の前の少年に、おそろおそろ声をかけてみた。彼も、その声で我にかえったらしい。視線が彼女とぶつかる。

彼女は、わずかに視線をずらしながら彼を観察する。一方、彼の方でも警戒した様子で彼女のことを窺っている。

お互い無言のしばらく時が過ぎる。

(やっぱり失敗か……)

そうして、彼女はこう結論した。目の前の少年は、どう見ても魔

王といった雰囲気ではない。

たしかに髪の色と、服装はあまり見慣れない。だが、別に禍々しいとか邪悪だとかいった気配は一切感じられない

夜のように真っ黒な髪に、それをさらに強調する白い肌。

それこそすらやましくらいにきれいで染みひとつない。

背は高いが、体つきはそれほどがっしりしているわけでもない。

自分より二、三歳くらい年上だと思うが、どうも頼りなさそうな感じだ。

それに、伝説の魔王の姿は白銀の鎧に包まれているはずだが、彼が着ているのは白く薄い長袖のシャツと青いズボン。そして背中 of 大きなバッグ。そのうえ、僕としてつれていくはずの白銀の猟犬など、影も形もない。

考えてみれば、魔法を覚えて日の浅い自分に魔王の召還などできるはずもない。召還魔法に失敗すると、別の場所から人間を強制的に移動させてしまうという話を聞いたことがあるが、たぶんそれだろう。

半ばがっかりし、半ば安心した。

「あの、あの、その、ね。いきなり呼び出されて驚いてるだろうけど、わたし別に怪しいものじゃないから」

いまだに警戒の色を隠さない少年にたいして、彼女は笑顔で、できるだけ明るく話しかけた。

だが、少年の疑いの目は変わらない。彼はゆっくりと後ずさりをする。

「あの、心配しないで！ ね！」

とはいうものの、怪しまず、心配しないほうが無理だろう。なにしろ、わけもわからずいきなり呼び出されたのだから。

「あの、だから……」

少年が言葉を発した。

「え？」

「
だが、彼女には聞き取れなかった。聞いたこともない言葉だ。
(しまったな。外国人みたい)

髪の色と服装でもしやとは思っていたが、やはりそうだった。

「あの、えっと、その……」

難しい状況になってしまったが、とにかく伝えるしかない。彼女はいつもより身振り手振りを大きくし、少年に訴えかける。

「あのね、わたし、危険、ない。わかる？ 敵じゃない、ない。怪しくない。わかる？」

少年はこちらを睨むように見続ける。それでも彼女は続けた。

「危険、ない。怖く、ない。敵じゃ、ない」

根気よく、なんども繰り返した。やがて、こちらの気持ちを通じたのか、完全ではないが目から警戒が薄れているのが見て取れた。

(よかった、わかってもらえたみたい)

彼女は胸をなでおろした。

「とりあえず、来て」

彼女は、彼にこつちへ来るように身振りをした。彼は軽く頷くと、ゆつくりと彼女の方へ向かってくる。

(とりあえず家につれてこう)

見知らぬ少年を一人暮らしの家にあげるのは不安ではあるが、彼女は加害者なのだ。まさか、このまま放り出すわけにはいかない。

「わたし、ポラリス」

自分を指差しながらそう言う。

「ポラリス？」

彼が、その名を復唱した。

「そう、わたしの名前。あなたは？」

だが、彼は答えなかった。こちらの意思が伝わらなかったのか。

「まあいいわ。とりあえずおいで」

外国人とのコミュニケーションは、時間をかければなんとかなる。

と、むかし彼女の父親が言っていた。細かいことは後々ゆっくりと話すしかないのだ。

歩き出した彼女の後ろを、少年はついていく。二人は、夕焼けが青く染めた空へ向かって歩き始めた。

エピソード1

ポラリスは、カーテンから差し込む光にふと目を開けた。

(もう朝なんだ……)

寝ぼけ眼を擦りながら、ベッドから這い出て、カーテンを開ける。

外はすでに日が登り、雲ひとつない赤空が広がっていた。日光は彼女の体をあたためるが、眠気はいまいち抜けない。

「きのうはあまり眠れなかったな……」

きのう、黒髪の少年をこの家に連れてきてから、とくになにかがあったわけではない。

彼はすすめた食事にも手をつけず、ひたすら父や祖父ののこした蔵書を眺めていた。外国人なら到底読めないはずなのに、なぜか飽きもせず、ずっとページをパラパラとめくっていた。

一緒にいてもなにができるわけでもないのに、彼女は早々に床にいた。だが、なかなか寝付けなかった。

いまこの家には自分と彼しかいない。見知らぬ異性がおなじ屋根の下にいる。そう考えると、どうも落ち着いて眠ることができなかったのだ。

「あう……」

しばらくすると、睡魔が襲ってくる。彼女は再び眠りの世界に落ちそうになった……。その時。

「……音楽？」

夢でも見ているのかと思ったが、そうではない。たしかに、音楽が聞こえる。弦を弾く、澄んだ音色の音楽だ。

「下からね」

ポラリスの眠気はいつきにふきとんだ。すばやく寝まきから着替え、下の階へ向かう。

朝日の差し込む窓。その窓辺に少年は腰かけ、そして弦を奏でていた。

（なんだろう？ あの楽器？）

見たこともない楽器だった。真ん中に穴の開いたひょうたんのような形の胴に、いくつもの弦が張った楽器。彼は、その弦を弾いて音を出しているのだ。

（いい音……）

はじめて聴いたが、なんとも耳に心地よい。彼女は、思わず聞き入った。そして、演奏がやんだとき、彼女は思い切り拍手をした。彼がこちらに目をやった。

改めてみると、非常に整った、まるで腕利きの人形師が作ったかのような顔をしていた。

一般にいえば美少年だろうが、どうもポラリスの好みではない。なんというか、どうもできすぎている、ともいうような、あまりにも整いすぎているような感じがする。

「起きたのか。おそかったな」

彼が言葉を発した。きのうは焦っていてよくわからなかったが、中性的な雰囲気をもった声だった。やや高い男声か、それとも低めの女声か。

やはりあまり好みではない……。

「え？」

だが、それよりももっと重大な問題があることに気づいた。

「いまの、あなた？」

「いまここには、俺とおまえしかいない」

やはり彼だった。

「いまおまえが喋ったのではないことは、おまえ自身が知っている。論理的に考えれば俺以外だれが喋る？」

黒髪の少年は、無表情な抑揚のない口調で淡々と言葉をつなげる。

「そ、それはそうだけど、そうじゃなくて!」

その喋り方にカチンときたが、いまは好奇心のほうで勝っていた。

「あなた、きのうまで喋れなかったでしょ、この国の言葉。なのに、どうして?」

「覚えた」

あっさりと言い放つ彼。

「覚えたって、どうやって……」

「文法構造がわかればどんな言語でも喋れる」

まるで至極簡単なことを言っているかのよう説明する少年。

「言葉には必ず一定の法則がある。その法則をつかめばあとは単語の意味を確定する。それだけのことだ」

だが、どう考えても簡単なことではない。それだけはわかる。それに、彼の喋り方は変わっている。どうも、人間味に乏しいというか……。

「だが、発音は書面だけでは完璧に理解しにくい。おかしいところがあったら言ってくれ」

なるほど、だからあんな抑揚のない口調なのか、と、とりあえずこれで納得することにした。

「ところで、『文法を理解した』って言ってたけど、どうやって?」

「本を読んだ。全部読ませてもらった」

「全部?」

思わず苦笑した。彼女の父と祖父とが集めた蔵書だ。狭い家の半分を占め、とても百や二百程度ではおさまらない。それを、一晩で、しかも言葉を覚えながら読破できるはずはない。

(意外と、冗談が好きなのかな)

たぶん、言葉をすぐ覚えたというのも嘘で、おおかた以前から知っていたのだろう。

「そうだ。そんなことより、朝ごはん作るね。食べたい物ない?」

「いや、ない」

この国の言葉には慣れていないのか、それとも単に無愛想なのか。

「そうそう、わたしの名前覚えてる」

「ポラリスだろ」

よく覚えていたものだ。記憶力や注意力がいいのはたしかなようだ。

「で、あなたは？ 名前」

「俺か。俺の名は冬星^{ふゆせい}。犬森冬星^{いぬもりふゆせい}だ」

変わった響きの名前に少々違和感を覚える。やはり、外国人の名前はどうしても奇異に感じてしまう。

「もっとも、この姿での名前だけだな」

「は？」

この姿？なにを言っているのだろうか。まさか、変身でもするわけでもあるまいに。

「えっと……目玉焼きでいいかな？」

「かまわん」

とりあえず、余計なことは考えないことにした。まだ出会ったばかり。違和感は、徐々に埋めていくしかないのだから。

朝食は、パンに目玉焼き、そして蒼茶という簡単なものにした。

「見ごとに青一色だな」

冬星の第一声に、ポラリスは少し頬を膨らませた。

「悪かったわね！ どうせ彩りがありませんよ」

卵に、パンに、お茶に……。たしかに、すべて青一色だ。本来ならここに赤い色の野菜でも加えたいところだが、いまは切らしてしまっている。

「いや、そういう意味ではない」

「じゃあ、どういう意味？」

「もともと青いのが不思議だ」

またも、わからないことを言い始めた。卵の青身に水色の白青身、青いパン、青いお茶。そのどこが不思議だというのだろうか？

「俺の世界では」

『世界』ということばに違和感があつたが、出身国のことを言って

いるのだらう、と勝手に理解した。慣れない外国語で喋っているのだ。言葉の使い方に間違いがあっても仕方ない、と。

「卵は黄色と白だ」

「へえ……」

そんな色の卵は聞いたこともない。

「パンは大抵茶色。お茶は赤茶色か緑か……とりあえず、そんな鮮やかな青ではないな」

「ふーん、茶色いパンね」

茶色のパン、赤茶色のお茶。土の塊と泥水を想像し、ポラリスは顔をしかめた。あまりおいしそうではない。

「それに、空の色も違うな」

「は？」

「俺の世界では、空は青い」

「青い空……」

国によって空の色が違うと言うのは初耳だ。空とは、赤いもの。それが常識であり、万国共通のものだといつも思っていた。

「青い空で、日が落ちるころになると空は赤く染まる」

太陽が東から昇る朝と、西に沈む夕方。その時にだけ空は青く染まるとというのが彼女の知識の全てだった。

「ちやうどこの世界とは逆だな」

想像してみた。青い空に赤い夕焼け……。

「なんだか、不気味ね」

どうしても、見慣れた空のほうが素敵に思える。

「まあ、そういうものだらう。自分が知るものと違うと不気味と感じるのさ。人間は」

『人間』という単語が妙に強調されていたような気がする。気のせいだろうか？

「ついでに言うと、ここでは海も赤いらしいな」

「ええ、わたしは見たことないけど」

ずっと山育ちで、海は本で読んだり人に聞いたりしただけだ。

「俺の世界では、海も青い」

「へえ……じゃあ、森は？ 木は？」

「ここでは白い葉っぱに、茶色い幹だ。」

「葉は緑。幹はこちらと同じ色だ」

「じゃあ、髪の色は？ この国ではわたしみたいな青や緑が多いけど……」

「黒、茶、金、赤……様々な色がある。青や紫は染めない限りない知らない場所の話は楽しい。ましてや、想像もしないこととなればなおさらだ。」

「こちらは、赤い空に、赤い海、白い森に、青や緑の髪の人々……。」

「あちらは、青い空に、青い海、緑の森に、黒や茶色の髪の人々……。」

「ねえ、どこにあるの？ あなたの国は？」

「このことは違う時空だ」

「またしても、よくわからないことを言われた。」

「それよりも、そろそろ説明してくれてもいいんじゃないか」

突然話を変えられ、ポラリスは一瞬戸惑う。

「俺がなぜ、ここにいるのか、ということだ」

「ああ、そうね……」

「考えてみれば、まだ説明していなかった。」

「ごめん。ほんとうなら、まっさきに説明しないとイケなかったのに」

彼は彼女の召還失敗により呼び出された被害者なのだ。もっと気をつかうべきだったのだ。

「まあ、いい。大体のこと察しがついている」

「え？」

「この世界には魔法が存在するそうだな」

彼女は、奇妙に思いながらもうなずいた。なぜ、そんなことを訊くのだろうか？

この世に魔法が存在するのはあたりまえのことだ。

軍事はもちろんのこと、交通、農業、工業、通信、など日常生活

のさまざまな場面において人々に恩恵を与えている魔法。

燃料なしに火をおこし、鉄製品を溶かさず形を変え、遠くの人と意思を通じさせ……。

魔法がなくなったらこの世はどうなるのか、想像すらできないほど魔法はすでに人々に密着している。彼のところには、それが無いのだろうか？

「そして、その中には『魔界』と呼ばれる場所から怪生物を召還するものもあるらしいな」

「ええ、あるけど。たしかに」

「それを使って俺を呼び出した。そうだな？」

彼女は頷く。

「だが、俺を最初に見たときの様子からして、意図して俺を呼び出したわけではない。召還魔法は失敗すると予期していなかったものを呼び寄せることがあるという」

正直驚いた。彼の物事を推理する頭脳にももちろんだが、魔法に関してかなり詳しいことに。召還魔法は高位の魔法に属し、その体系等については一般にあまり知られていない。

不思議だ。さっきは、まるで魔法など見たこともないような話し方をしていたのに。

「つまりだ。俺が呼び出されたのもその召還失敗ではないか。違うか？」

「その通りよ」

改めて言われると恥ずかしい。自分が魔法を失敗したこと。そして、

「ほんとうにごめんなさい。わたしのせいで、関係のないあなたを、知らない土地に連れてきてしまっただけ」

もし、これが自分の立場だったらどうなるか？考えるだけでも恐ろしい。知らない土地、通じない言葉……。やはり、召還魔法など気軽にやってはならない魔法だ。

「気にしなくていいさ。どうせあのままだったら、俺は……」

そこで言葉を切り、彼はそのまま宙を見つめる。あいかわらず無表情。

だが、彼女はそこから目を離せなかった。無表情なのに、なぜか感情が感じられたのだ。

（なんだろう、この感じ？）

彼から伝わる不思議な感覚に、ポラリスは妙な親近感を感じていた。

言葉にできないほど悲しいのに、言葉で表現できないからだれにも伝えられない。そんな悲しみ……とでも言うべきか。

「あら、ぜんぜん食べてないじゃない！　だめよ、食べないと」
自分が、普段から押さえ込んでいる感情にどこか似ている。そう気づいて、彼女は無理やり彼の思考を中断させた。このままではどうにもいたたまれない。

「ところで、ひとつ聞きたいことがあるのだが」

彼のほうから話題を変えてくれてほっとした。

「なに？」

「あの魔法で、おまえはいったいなにを呼び出すつもりだったんだ？」

「え？」

「俺はきのう、全ての魔法書を読み、その中の魔法陣を記憶した。しかし」

（記憶した？）

現在存在する召還魔法陣は千近くもある。そのうえ、ひとつひとつも大量の線と図形からなるかなり複雑なものだ。それをすべて覚えたと言うのか。一晩で。

「おまえが書いていた魔法陣と同一のものはおるか類似の物さえなかった」

「あ、あなた昨日のを覚えてるの」

彼があ魔法陣を見たのは僅かな時間。しかも、見ず知らずの土地に呼び出されて混乱していたはずなのに。

「ああ、覚えた」

冬星はあたりまえのようにそう言う。

「一度見たものは、忘れないようにできているのでね」

「できてるって……」

さっきのすべての蔵書を読んだと言う話は本当なのか？

そして、言葉を一晩で覚えたという話も。また、彼の話が本当だとすれば、読んだ本の内容を完璧に記憶しているということか。まさか。そんなことが人間に……。

「話を戻そう。なにを呼び出すつもりだったんだ」

「え、それは……あ！ いけない！」

ポラリスはわざとらしい大声をあげ、大げさに席から立ち上がった。

「お昼の用意しないとしないと！ 材料取ってくるから！」

まだ朝食も終わっていないが、とくにうまい言い訳も見つからない。だが、いまは一刻も早くこの少年の前から去りたかった。ポラリスは逃げるように外へ飛び出していた。

エピソード2

魔法温室。

彼女の家から少しはなれた所に、この設備が設けられている。特別な魔法がかけられ、一年中様々な野菜や果物が収穫できる温室だ。いまはなきポラリスの両親がつくったものであり、彼女が一人で生活できるのも、この設備のおかげである。

「まだ、熟していないわね……」

この中で育てれば、通常の何倍もの速さで植物を育成できる。種をまいてから、早い物なら二三日で収穫が可能となる。だが、最近種をまいたのは昨日の朝。さすがに、収穫にはまだ早い。

（だけど、あいつ、いったい何者なのかしら）

彼のいう話がすべて本当だとしたら、到底人間ではない。

あの記憶力といい、あの喋り方といい、あの髪の色といい、あの不思議な色の世界の話といい……。

（やっぱり、魔族？）

人間の形をした魔族と呼ばれる魔物がいる、という話を聞いたことがある。

なんでも三つの願いをかなえるかわりに、死後、願いをかなえた人間の魂をもっていくらしい。現在ではただの伝説としか認知されていないが、まさかそれだろうか？ だとしたら、大変なものを呼び出してしまったことになる……。

そこまで考えて、そして苦笑した。

考えてみれば、彼女は昨日、魔王を呼び出そうとしていたのだ。

（それにくらべれば、魔族なんて子どもみたいなものなのに）

急に可笑しくなると同時に、少し情けなくなつた。やはり、自分の覚悟はそんなものだったのか、と。

「あいつに確かめてみよう」

魔族だったら、それでいいではないか。魔王ほどではないにしろ、この世界にひと波乱起こせるはずだ。それで魂がもっていられるなら、それでいい。所詮、死んだ後の話ではないか……。

考えがまとまり、彼女は家にもどることにして、温室のドアを勢いよく開けた。

すると、だれもいないはずの庭に、人影があるのが目に入った。

「トーセイ？」

彼が、自分を探しに表に出ていたのだろうか。

だが、すぐに別人だということがわかった。

がっしりとした体格、腰にさした剣、そして、なによりその服装。カーキ色の軍服。それは、彼女がこの世で二番目に憎む組織のものであることを示していた。

男の顔がこちらを向く。

（しまった！ 気づかれた）

彼女は駆け出そうとしたが、男は体格にかかわらず俊敏だった。

たちまち彼女の目の前に立ちふさがり、剣先を喉元に突きつける。

「動くな。もちろん、大声も出さな」

低く抑えられた、威圧的な口調。

(いつもそうなんだから……)

彼らの態度は、いつもそう。このように威圧的で、暴力的で、尊大で……。

「帝国軍兵士……」

ポラリスは、思わずその憎き名を口にする。

「帝国？ 違うな」

男の顔に笑みが浮かんだ。

楽しい笑いとは程遠い、見ていて吐き気がするような嫌な笑いだ。「俺は、ただの山賊だ。もつとも、むかし帝国軍にはいたがね」いつも彼らはこの受け答え。これを聞くたびに、全身に怒りがこみ上げる。

「兄貴、誰もいませんでした」

家のほうから、もう一人。おなじように緑色の服をきた男が走ってくる。

「たしかか？」

「はい。魔法を使ってみました、少なくとも人間はいないようです」

「そうか。なら、食料と金目の物を奪って、家に火を放つ。だが、その前に……」

男の目が、急に細くなる。口の中から赤い舌が蛇のように這い出て、唇を湿らす。

「兄貴？マジですか。こんなガキに」

「ガキでもいい。こんな辺境で、なにもなかったんだからな」

ポラリスの体が、恐怖で震えた。目の前の男がなにをしようとしているのか、はっきりとわかる。

(助けて！)

男の太い左腕が伸びてくる。

だが、彼女は恐ろしさのあまり目を閉じることもできなかった。その手を、恐怖に震えるまま見つめるしかなかった。その時だった。その曲が流れ出したのは。

「なんだ、この音楽は？」

男の手がとまった。突然流れ出した、その不思議な音楽に絡みつかれたかのように。

（この音は！）

間違いなく、先ほど聴いたあの楽器の音色。だが、

「な、だんだ！　これは！」

不協和音の多いその音程。不気味、としかいいようのない、背筋が凍りつくような旋律。聴いているだけで、吐き気がし、聞き続けるとそのまま気がおかしくなりそうな音楽だ。

「だ、誰だ！　こんな演奏をするのは！」

全員が目が、音のする方を向く。そして、屋根の上に人影を見た。不思議な弦楽器を抱えた黒髪の少年。

「だ、だれだ！　おまえは！」

男が、屋根にむかって叫ぶ。演奏がやんだ。

「驚かせてすまなかつたな。登場するときは、高いところでギターを弾くのが決まりなんだ」

言い終わると同時に少年が跳んだ。ギターとかいう楽器をすばやく背負い、そのまま空中で一回転。そしてまっすぐ、男に向かって、

「うわー！」

男は叫び声と同時にポラリスをはなし、後方へと吹き飛ばされた。

そして、砂埃を巻き上げて、地面に叩きつけられる。

少年の蹴りが、見事に男の顎に炸裂したのだ。

彼は、相手を蹴った勢いで後方に跳び、音もなく着地する。

「やれやれ、どこの世界にも小悪党はいるものだな」

「トーセイ！」

ポラリスは、彼の元に走って思わずしがみついた。

「あ、ありがとう助けてくれて……」

信じられないという気持ちとやはりという気持ちがポラリスの中で交差した。あんな高所から正確に相手に蹴りをいれ、しかもバランスを崩すことなく着地。人間業とは思えない。

「べつに助けたくて助けたわけじゃない」

彼は抑揚のない感情のこもっていない口調でそう言う。

「身近の人間に明らかかな被害が及んでいる場合、必ず助けにいくようにできているのさ」

あいかわらず意味がよくわからない。

「おい、なにが誰もいないだ！」

「す、すいません、でもたしかに……」

だが、事態は解決していない。飛ばされた男が、ふらつきながらも立ち上がるうとしていた。

「小僧。よくもやってくれたな」

完全に立ち上がり、再び剣を構える男。

「不意をつかれて不覚を取ったが、その程度で調子に乗るな」

男がじりじりと距離を縮める。一方、子分の方も杖を構えている。

(まずい！ 魔法使いね)

剣と魔法。両方でこられたら、かなり分が悪い。

「おとなしく小娘をよこせ。そうすれば命だけは助けてやる」

「断る」

冬星は力強く拒絶する。

「『その命令に従うことにより、明らかに他の人間に危害が加わる場合』特例として人間の命令に逆らうことができるのですね」

冬星の姿が一瞬消えた。

「それと」

そして、男の目の前に現れる。

「『明らかに他者に暴力をもつて危害を加えようとする人間』に對しては、特例として死なない程度の暴力は認められる」

冬星の足が男の手を蹴り上げた。剣が、宙を舞う。

「殺せないのは残念だが、徐々に暴れさせてもらうぜ！」

手を凄い勢いで蹴られて、男の体勢が崩れた。

その体勢を立て直すまもなく、懐に入り込んだ冬星のパンチを直に顎に食らい、大きくのけぞる。

さらに、冬星の肘が腹に突き刺さる。

「うぐ……」

男は一声うめいて、仰向けに倒れた。そのままピクリとも動かない。

わずか数秒の出来事だった。

「さて、次はおまえか」

冬星の目が、子分の男に向いた。

「ひ！」

情けない悲鳴をあげ、あつさる子分。

「おまえは直接危害を加えていない。よって、現段階ではおまえを他者に害を加える存在として認識できない。残念だが」

そう言うと、彼は子分に背を向ける。

「あのでかいのを連れて、帰るんだな」

つまらなそうに、そう吐き捨てる冬星。

「ふ、ふざけるな！」

冬星のその言葉を聞き、さきほどまで青ざめていた子分の顔が、一瞬にして真っ赤になった。そして倒れた男のもとに駆け寄る。

「兄貴をこんなにされてだまっていられるか！」

子分は懐から一枚のカードを取り出した。

「あれは！」

ポラリスの目はカードに書かれている魔法陣をはつきりと確認した。

「気をつけて！ 召還獣を呼び出す気よ！」

男が目を閉じて呪文を唱え始める。

「灼熱の息を吐く真紅の竜よ。我の声を聞き、我の願いをかなえよ。この世界と汝の世界のを隔てるをこじ開けよ。そしてこの大地に立て。そして、愚かなる者を焼け、殴れ、殺せ！」

呪文がおわると同時に、男はカードを地面に叩きつける。

そこから赤い煙が立ち登る。それは、一箇所にとまりながらゆっくりと形を作り始める。長い首、巨大な足、頑丈な尾……やがて煙は硬質の赤い鱗に変質し、巨大な生物の姿となった。

「大地に立て！ 火炎竜サラマンダー！」

赤い鱗に覆われた体。刃のような牙。翡翠のような目。ポラリスが、本で読んだのとおなじ姿をしている。

まさしく、火炎竜サラマンダー。火炎系では中級クラスの魔物だ。

だが、到底並みの人間が対抗できるようなものではない。

竜の背丈は、優に家の屋根の高さに達している。その巨体で大地をゆらしながら、こちらににじり寄ってくる。

「逃げて！」

ポラリスは叫んだ。だが、冬星は一步も動こうとしない。

「ほお、これが召還獣か」

珍しい物を見て、感心する子どものような、緊張のない声。

「無から、有機質の生命反応。自然科学の法則もあつたものではないな」

悠然とかまえる冬星。

竜が動きを止めた。そして、口を開く。

「危ない！」

ポラリスは叫んだ。だが、避けられる間合いではない。

竜の口から、まっすぐ冬星にむかって炎が溢れる。それは、一瞬にして冬星を飲み込んだ。

「冬星！」

「どうだ！ サラマンダーの力を見たか！」

男が高笑いをする。ポラリスは、ただその燃え盛る炎を見つめるしかなかった。

(サラマンダーの炎は、鉄をも溶かす)

人間はもちろん、どんな屈強な魔獣でも食らったら最後。皮も肉も焼け、骨まで灰になるであろう。

だが、

「なかなかの炎だな」

ポラリスは耳を疑った。だが、声は間違いなく冬星のもので、炎の中から聞こえた。

「おかげで、細胞が燃えてしまった」

そして、炎の中からゆっくりと、這い出すもの。それは、人の形をしたもの。

「な、なんだ、あれは！」

男が驚きの声をあげる。ポラリスは声を出すこともできない。

炎から出てきたのは、あの黒髪の少年ではなかった。

銀色の甲冑が立っている。そうとしか表現ができない、頭から足の先まで、全身が銀色に輝いた人型のもの。ところどころ、複雑な模様が表面に描かれている。

それが、まっすぐ大地に立っているのだ。

『それ』がポラリスのほうをむいた。

顔には口も鼻もなく、目の部分には大きな黒い帯のようなものがある。

よく見ると、その黒い帯は半透明で、なかに赤や緑といった不思議な光が点滅を繰り返している。

「あ、あなたトーセイなの？」

「ああ」

たしかに、声は彼のものだった。

「だが、いまは冬星ではない」

銀色の、冬星だったものは、火炎竜に向けてかまえる。

「い、いけサラマンダー！」

男の命令に答え、竜はその巨大な前足を上げ、そのまま銀の甲冑に叩きつける。だが、『それ』は避けない。ただ、前に腕を伸ばさずだけ。

ドン、と重い音が響いた。

「俺の世界では、変身すると名前が変わる決まりなんだ」

巨木のような足を、『それ』は腕一本で押さえていた。竜が吠え、振りほどこうとするかのようにもがく。だが、『それ』はまったく動かない。

『それ』が、手首を回した。戸の握りを回すような、そんな軽い動き。そのように見えた。だが、

「グギャー！」

竜の悲鳴に近い咆哮が響く。辺りの山々にこだまし、音の洪水と鳴りあたりを飲み込む。

足が、大木のように太い足が、ねじれたのだ。骨の折れる硬質な音も、咆哮に交じり合う。

『それ』が手を放す。支えをひとつ失った竜は、もはや自らの巨大を維持できない。そのまま、前のめりに倒れこむ。

「弁償してもらおうとしよう。燃えたギターだな」

『それ』は、大地を蹴って跳躍した。一気に巨大な竜の頭部にまで達する。

「おまえの命で」

空中でその頭部に蹴りを入れる。固い物が碎ける音。飛び散る青い血。

そして、宙を舞う、首。

「そんなばかな！」

ポラリスと子分の声が重なる。

サラマンダーの首が、頑丈な、鉄よりも頑丈な首がはねられた！

たったの一撃で。

たったの一撃で！

そして、竜の巨体が崩れ落ちる。大地が激しく揺れ、砂埃が舞い上がった。

「いまの俺の名は」

砂埃が消えると、冬星だった白銀のものはすでに地に降りたっていた。その輝く全身には、一点の曇りもない。

「人造人間プロキオン」

エピソード3

「じ、人造人間……プロ……キオン？」

「ああ、いまの俺の名、そして、この姿が」

プロキオンと名乗ったその体が、太陽の光を反射して眩しく輝く。

「俺の本当の姿だ」

「本当の姿？ 冬星が鎧を着たんじゃなくて？」

その可能性も僅かではあるが考えていた。

「逆だ。冬星の姿の時は、この本体に人工細胞をまもっていたんだ」

また意味のわからない単語が登場した。

「で、いつたいあなた何者？」

人間でないことはもうわかっている。やはり、魔族か。それとも、まさか。

「ロボットだ」

まるで予想もしない答えが返ってきた。

「ろ、ロボット？ なにそれ」

「人が作った人間もどきだ」

「人が作った？」

サラマンダーを一撃で倒せるようなものを人が作ったというのか。

「ああ。機械でできている」

「……キカイ？」

「この世界では、機械技術は進んでいないようだからな。わからないもの無理はない」

またでた。『この世界』。どうやら、単なる言葉遣いの間違いではなく、本当に『別の世界』と考えたほうがよさそうだ。

この世界。そして、魔物たちの住む魔界。

このふたつ以外の、誰にも知られていない世界から、自分は彼を召還してしまったのだ。

なんと言っていていいかわからず、彼女は押し黙ったまま、視線をよそにやる。

すると、サラマンダーから赤い煙が立ち昇るのが見えた。

「……………死んだ召還獣は消滅するんだっけ」

見ると、二人の男の姿はすでにない。逃げ帰ったようだ。

「と、とりあえずありがとうね」

「別に。礼を言われるようなことはしていない」

そういうと、それは腕にある突起を押す。突如、光り出す体。その光が、その体を覆いつくす。そして、その光が消えたとき。

「と、トーセイ……………」

そこに白銀の姿はなく、黒髪の少年が立っていた。

「時間制限があるのでね。戦闘モードは」

なぜか、ちゃんと服も着ていた。

「ところで、えっと……………」

「冬星だ。この姿では」

「トーセイ、たしかわたしがなにを呼び出そうとしてたのか、って聞いたわよね？」

彼は黙って頷く。

「来て」

彼女は彼をともない家に入り、そして二階の自分の部屋まで案内する。人を……………正確に言えば人ではないが……………入れるのは久しぶりだ。ここには、書庫に入れずにおいた、ただ一冊の本がある。

「これを見て欲しいの」

「『禁断の書』……………」

彼は、その本をパラパラとめくった。

「なるほど。おまえは『白銀の狩人』を呼び出すつもりだったのか」

「まさか、あれで？」

「ああ、すべて読んだ」

さすが、と言うべきか。もはや、いちいち驚いてもいられない。もう驚くのはやめよう。そう、胸の中で誓った。

「『白銀の狩人』。この世界すべてを狩りつくす存在。この世を破局に導く、通称『魔王』。また、随分とぶっそうなものを召還しようとしたな」

彼の視線がさすように突き刺さった。

「なんのつもりだ？」

彼女は下を向き、つぶやくように言う。

「この世界を、滅ぼしてほしかった」

彼は、なにも答えない。

「正確に言えば、いまの世界を壊して、つくりなおして欲しかった」この本にもあるが、『魔王』は世界を滅ぼした後『神』に変わり、世界を美しく再生させるといふ。

「すると、おまえはいまの世界を憎んでいるのか」

彼女は首を縦にふる。

「あなた、下の本を読んだなら知っているでしょ？この国がどういう状況にあるか」

だいたい五十年前。この国と、隣国の帝国との間に戦争がおこった。当時、帝国はお家騒動真っ只中で国力の弱まっていた時期であり、それにつけこんでの侵攻であった。

「だが、この国は負けた」

「そう。帝国の新皇帝が国民をまとめて反撃に出たの」まさに歴史的な敗北を喫し、国民は戦争を指導した王をそして王家を非難した。

「そこで台頭したのが、『共和同盟』」

「そう。以前から王家の廃絶をうっていた連中よ」

共和同盟は革命を起こし、王を処刑し政権を奪取した。そして、国は共和国となる。

「彼らは『平等主義』を打ち出し、身分や経済格差を廃止した」

「そう。金持ちから強制的に財産を没収してね」

私有財産の原則禁止。すべての共有化。均等なる分配。

「そして、『永久平和主義』のもと、自衛以外の戦争は禁じた」
戦争に疲れていた当時、国民は大歓迎だったらしい。

「だけど、五十年たつてその平等がおかしくなりはじめたの」
最初のうちはほとんどが賛成だった平等。しかし、いちど皆が平等になると、あちらこちらから不満が出始めたのだ。

「人間とはそういうものだ。自分よりうえがいるのは気に入らないが、自分はうえにいきたがる」

「ええ。やがて国中に『働いたら働いただけ認められたい』『もつと豊かになりたい』と思う人が増え始めたの」

働かなくても最低限の生活は保障される。一生懸命働いても最低限の生活しか許されない。

なら働かなくてもおなじ。そう考える人が増えるようになった。いまや生産性はがた落ちし、国中活気がなく、よどんだ状態だ。

こうした状態に政府は有効な手を打てず、ただ無理やり国民を働かせ、平等主義のすばらしさを毎日ひたすら宣伝するだけ。

「そして、もうひとつの『平和主義』とやらも極端になっているそうだな」

たしかに、自衛以外の戦争をしない、という方針そのものはポラリスも賛成だ。

「だけど、どう思う？ 戦争で人が死ぬのはよくないが、それ以外ならいいって言う国は」

「先代大統領の演説だな。『たとえわずかな被害しか出ない戦争でも、甚大な犠牲の出る平和のほうが何十倍も尊い』と」

十年ほど前から帝国が国境付近を中心に荒らしまわっている。しかし、政府はなにもしない。決して軍隊を動かさそうとしない。

「政府は『戦争』になるのが怖いのに」

さすがに正式に宣戦布告してくれば政府も動かざる得ないが、帝国軍は『帝国軍を脱した山賊』と自称しているため、警備の役人くらいしか動かさない。

「だけど、むこうは軍人。さつきみたいな下っ端でも相当な魔法や剣技を使うわ。警備の役人なんかじゃ齒が立たない」

実際人が大勢殺されている。じわじわと国境付近の領土は侵食されている。なのに、政府は帝国に抗議すらしない。すれば、戦争になる可能性があるからだ。

「人の幸せよりも平等・平和という理念を大切にする国。相手の弱みに付け込んで軍事侵略する国。どこでもおなじだな」

冬星の言葉には、どこか呆れのようなものが漂っていた。

「それに帝国は共和国以上に酷いの」

五十年前の戦勝以来皇帝の力はさらに強大な物となり、独裁制の元強大な軍事大国化が進められている。そして、まわりの小国を次々と支配し続けている。

税は重く、徴兵制や地強制労働などで、国民の生活は困窮にあえいでいるという。

「わたし許せないの。理念や理想ばかり大切に作る共和国も、人を道具のように使う帝国も。それに」

彼女の目が少しばかり涙で潤んだ。

「帝国はお父さんとお母さんを殺したし、共和国は見てみぬふりをしたわ」

彼女の祖父母は財産を奪われ、この辺境の地に追われ、失意のうち死んだ。

彼女の両親は貧しいながらも親子三人平和に暮らしていたのに、半年ほどまえ帝国軍人に殺された。

祖父母の幸せを奪ってまで作られた国が、人々を幸せにしない。そして、それにつけこみますます人々を不幸にする国がある。

「すると、俺に力をかせということか。こういう話をするということとは」

「ええ。あなたの力は見せてもらったわ。そして、あの白銀の姿」
白銀の獵犬はつれていないものの、姿形はだいたい伝説の通り。そして、あの桁外れの戦闘力。

「なるほど、おまえは俺に、魔王になれ、と言いたいのか」
彼女は力強く頷く。

「そう。あなたには魔王になって欲しい。そして、この腐った世界を……」

帝国も共和国も、このまま存在しつづけければ人々を不幸にするだけ。その他の小国も、帝国の圧力を受けて国力は底をついている。もはや、存在に値する国はない。

「あなたの力があれば、帝国の軍隊ともやりあえるはず。だから……」

「無理だ」

信じられないくらいあっさりと、そして冷たい言い方だった。

「な、なんで！」

「俺は製作者によってある枷をはめられている」

「枷？」

「そう、その枷がある限り、おれには実力を全て発揮できない」
「どうということなのだろうか？」

「いまの状態では無理だ」

「いまの？」

その言い方からすると、事態が変わる可能性があるというのか。

「俺の計算が正しければ、もうすぐのはずだ」

「もうすぐって、なにが？」

彼の目が窓を向いているのに気づいた。なにが起こるといっただろうか。

「俺はおまえに呼び出される直前、仲間……とでも呼ぶべきものとして行動を共にしていた。そして、それと共に不思議な光に飲み込まれた」

同時に？

だが、呼び出されたのは彼だけだ。

「そこで俺は昨日、異世界とこちらの世界をつなぐ次元に関して計算し、その流れを割り出した。その結果、大きなもの、重いものは

遅れてくることがわかった」

大きく重いもの？

たしかに、大きなものを呼び出すときほど強い力が必要で、力が足りないとかかなりの時間を要する。

だが、それはさっきのサラマンダーよりも、何倍も大きなもの場合のはずだ。まさか、彼らの仲間が山のようにおおきいわけではないだろうに。

「だから、そろそろのはずだ」

その時だった。突然、地面が大きく揺れたのは。

「着いたか」

彼が窓を指差す。

ポラリスは急いで窓を開け、外を眺め……

「な、なに、あれ！」

驚くまい、ときめていたはずなのにやはり驚いてしまった。驚くよりほかなかった。

おそらく、きのう召還をしたあたり。

ここからはかなり離れているはずなのに、その姿がはっきりと見える。

まるで山のように巨大な……というよりも、山よりも明らかに大きい、鋼鉄の要塞。全体がいぶし銀のように鈍い光沢を放っており、所々から巨大な筒が生えている。その直径は人が楽に入れるくらいはあるのではないか……。

「空中戦艦ベテルギウス」

「空中……戦艦？じゃあ、あれは……」

「飛ぶ」

あんな巨大なものが飛ぶというのか？そして、その後から。

「ま、まだいるの！」

さらにもう一体が出現した。

南天にさしかかった太陽の直射を浴びて、輝く純銀の体。怪しく光る赤い目。そして、のこぎりのような牙の群。

「い、犬？」

その形は犬に似ていた。純銀でできた、巨大な犬だった。

「獣型巨大兵器シリウス」

シリウスといわれた大犬が、突然首をあげ、そしてほえる。その声があたりの山々にこだまする。

（あれは、白銀の猟犬）

想像していた以上に大きい、間違いない。

「二体とも、俺とシステムを一部共有し……簡単に言えば俺が自由に操れる」

夢でも見ているのだろうか？想像以上の出来事に、まばたきもできない。

「ポラリス。これで大丈夫だ」

彼の手が肩に乗り、彼女はようやく我にかえる。

「あの二体。そして、おまえの協力があれば」

彼は力強く続ける。

「おれはおまえの望みをかなえてやれる。この世界に破壊と再生をもたらせる」

ほぼ伝説のとおりだった。白銀の甲冑をまとった万物を狩りつくす狩人と、その僕たる白銀の猟犬。自分の魔法はやはり成功していたのだ。

「じゃあ、わたしの願いをきいてくれるのね」

「ああ。この腐った世界を滅亡させ、そして理想の世界に再生しよう」

彼女の胸に熱いものがこみあげる。

これで、苦しむ人はいなくなう。みんなが幸せに暮らせる世界が始まるのだ。

「俺はいまから魔王となる。そう、人の手により作られ、時空をこえ、この大地におりたった魔王。その名は」

「人造魔王プロキオン」

それから三年余りの月日が流れた。

「全員、整列！」

ポラリスは軍団員にむかつて号令を発した。その数およそ二百人。わずか三年で大陸のほぼ半分を手中におさめた『ダイクコンステレーション魔王国暗黒星座』
国軍の主要な面々である。

「各作戦は順調なようですね。魔王様からもお褒めの言葉をいただいております」

魔王自身は、滅多に姿をあらわさない。

魔王と軍団員。その橋渡しとなるのが、魔王の副官および軍司令である彼女の役目だ。

「では、それぞれの部隊の定期報告おねがいします」

軍は、三つの部隊にわけられ、それぞれ「一等星」と呼ばれる部隊長によって統括されている。

「まずは、人間部隊ヒューマンズ」

人間部隊。文字通り、生身の人間からなる。

ポラリスの呼びかけにこたえて、長身で青いフードをまとった男が進み出る。人間部隊一等星、コードネーム、アルクトウルス。

「順調に共和国への侵攻を進めております。北部の主要都市はすべて陥落させ、あとは南半分だけです」

もともと帝国の軍人であったが、皇帝のやり方に反発を抱き離反。自ら魔王軍に志願した。

彼をはじめ、現社会に不満をもったものたちが続々と魔王軍に参戦した。その数は約四万。数では帝国や共和国の正規軍に劣るが、全員が達人クラスの魔法や剣の使い手だ。

戦闘時の主力としてももちろん、各機関への根回しなども担っている。

「さらに、嫌軍主義者・平和愛好者の団体との裏工作も進んでおります。早ければ、あと半年ほどで共和国は制圧できます」

「そう。では、作戦をそのまま推し進めてください。次、魔法人形ドールズ

部隊、報告を」

魔法人形部隊。「魔王の魔力により作られた生き人形」たちからなる。

ポラリスの呼びかけに応じて、紫色の腰まで届く長い髪を揺らしながら、清楚な雰囲気をまとった女性が進み出る。魔法人形部隊一等星、コードネーム、ヴェガ。

「帝国に対するゲリラ戦を目下継続中です。あと一両日中に、中央部の砦をおとせるでしょう」

「この世界」での「魔法人形」第一号として誕生。

彼女のほか、魔王は様々な形の魔法人形を作り上げた。数は少なく百人ほどだが、部隊長のヴェガをはじめ、一人ひとりの戦闘力がずば抜けている。とくにゲリラ戦において、彼らの右に出るものはない。

「よい報告を期待しています。次、モンスターズ魔物部隊。報告を」

魔物部隊。その名の通り異形の非人間生物たちからなる。

赤茶けた鱗に覆われた、二足歩行のトカゲがポラリスの言葉に従い進み出た。魔物部隊一等星、コードネーム、シユアト。

「魔法人形部隊が砦を落としたら中央の町へ一気に攻め込む。現在、待機中だ」

なんの変哲もない野生動物大トカゲ。それに魔王が手を加え「強制進化」させ知能や高い戦闘力をもたせた。

彼をはじめ、魔王は様々な動物を進化させた。その数は魔王軍最大の六万人余り。

部隊長であるシユアト以下百名ほどしか知性はもっており、大半は命令に従うだけの怪物にすぎない。

だが、その凶暴性により、正面からのぶつかりあいには恐るべき破壊力を発揮する。大規模な戦闘時、先陣をきつてなだれこむのはいつも彼らである。

「このままでは腕がなまる。早めに出番をくれ」

「わかりました。検討しましょう」

各部隊長の報告がおわり、あらためて軍全体を見回す。

(ほんとうに、おおきな組織になった……)
わずか三年で、ここまで大きくなるとは、あのときは想像もできなかった。

(そう、あの時からわたしの、そしてこの世界の運命は変わった)あと少しで、最初の目的である現世界の滅亡は達成させる。もはや、この魔王軍に対抗できる勢力は存在しない。

「それでは、偉大なる魔王陛下の尊き希望をかなえるため、皆全力を尽くすこと」

ポリスが右手を挙げると、全員が一斉に胸に手を当てた。

「我らが命、すべて魔王陛下のために！」

『我らが命、すべて魔王陛下のために！』

「ダーク・プロキオン！」

『ダーク・プロキオン！』

黒い魔城のなかに、軍団員たちの声が次々とこだました。

第一章（後書き）

いかがだったでしょうか？
感想をお聞かせください。

第二章（前書き）

心をもつたために、苦悩する機械。
人間でなくなった人間の悲しみ。

第二章

エピソード4

『あなたの名は、プロキオン？』

『プロキオン？』

『そう、そして人間名は冬星』

『冬星？』

『そう、犬森冬星。私の息子よ』

銀の糸で刺繍をした漆黒のマントと服。

まるで、夜空に輝く星座を切り取ったような衣装を身に着けた、夜のように黒い髪の少年。

黒檀でできた椅子に腰掛け、静かに眠っている。なにも知らないものが見れば、ただの少年。

だがこの少年こそ、いま世界を滅亡に導こうとしている魔王である。魔王プロキオンは、ふと目を開けた。

「夢か……」

夢をみるたび、彼は苦々しく思う。機械である自分が夢などを見ること。そして、見る夢がいつもきまってあの女性に関するものであることに。

「余計な機能をつけたものだ。あの女は」

彼の睡眠は、生物の睡眠と異なり、十日に一回のシステムの定期チェック。

その間、彼はきまって『夢』を見る。

（なにが息子だ。「母さん」とよばせてくれなかったくせに。自分とおなじ姓もくれなかったくせに……）

あの女性。

自身の製作者である科学者・九重九美子。通称ドクターナイン。彼

が、最初に、そして最大に憎んだ人間。

（兵器である俺に、なぜ夢を見させた？ なぜ、感情を持たせた？

なぜ、人の姿をもたせた？ なぜ……）

夢を見た後は、必ずあの時の感情が蘇る。人を殺せないはずの彼が、はじめて人を殺した時の感情が……。

「冬星、入るわよ」

彼女の声で、ふと我に返る。

「ああ、入ってくれ」

もの思いにふける。また、人間のようなくせが出てしまった。

「喜んで。どこの部隊も順調みたいよ」

彼がこの世界に来てはじめてであった人間であるポラリス。

出会ったときは幼さの抜けでいなかったが、いまはもうすっかり大人の顔つきだ。

「このぶんだと、あと一年もしないうちに第一の目標は達成ね」

第一の目標。それは現在の世界、腐りきった世界を消滅させること。

「そうか……それはいいが、ポラリス」

「なに？ 冬星」

「俺をその名で呼ぶな」

冬星は、人間として生きるときの名。もはや、彼には必要のない名だ。

「ごめんなさい……でも」

彼女が、さびしそうな顔をする。

「せめて……二人きりの時は、いいでしょ？」

頼み込むように、上目遣いをする彼女。

「……許可する」

彼には拒否することはできない。ほんとうは拒否したい。しかし、できないのだ。

彼女を副官としてパイプ役利用しているのは、軍団員、とくに人間たちとの接触を避けるためだ。

『人間の命令には従え』という法則を組み込まれている彼は、人

間のささいな『お願い』や頼みごとを断ることはできない。

そんなことが知られば、また人間にいいようにされる生活に戻るだけだ。

本来なら人間など軍におきたくない。人間部隊など廃止したい。しかし、各作戦を円滑に進めるためにはどうしても必要な存在であるため、あえて使い続けている。

（しかし、俺はなぜこの女を副官として使い続ける？）

いまの役目は、彼女でなくてもできる。

それどころか、最近『お願い』が増えてどうにも気に食わない。

本当なら、適当なロボットでも作ってパイプ役にすべきなのだ。

（なのに、俺はなぜそれをしないのだ？）

自分でも答えがわからない。自分は合理的に思考する機械なのに、そんなわけのわからない悩みを持つ。それが、どうしても納得できない。どうしても不機嫌だ。そして、不機嫌だと思っ感情が自分にあること自体が不機嫌だ。

「冬星？」

「すまない。一人にしてくれ」

とりあえず、その感情の原因のひとつを遠ざける。

いまの彼には、それぐらいしかできなかった。

ポラリスは改めてプロキオンの顔を見た。非常に整った顔。三年前、はじめてあったときと全く変わっていない。

あの時は、彼が年上に見えたが、いまはおなじ位の年になってしまった。もうすぐ、自分のほうが年上の容姿になってしまう。

彼は永久に少年の姿なのだ。

彼女が副官を勤め、プロキオン自身は滅多に姿をあらわさない理由をそれで説明していた。

こんな頼りなげな外見の魔王では、威厳が保てないから、と。

だが、その説明には疑問を感じる。頼りない外見という点では、彼女だっておなじこと。

むしろ、格段優れた力があるわけでない彼女が副官などしていることに、軍のなかでも不満と不審の声がある。口さがないものは、彼女を「魔王の愛人」と呼んでいるともきく。

「どうした、出て行ってくれ？」

「うん、いま行く」

彼は、できるだけ人と会うことを避けている。彼女は、そう感じるようになっていった。

「ねえ、冬星」

「なんだ」

「あなたの過去のこと。向こうの世界でのこと。もし、よかつたら話して欲しいの」

彼は自分から過去を話したことはない。

どんな生活をしていたのか。どんな人と付き合いをもっていたのか。

「もちろん、嫌ならいいの。あなたが、話したくなったらいいから」

もし、『話して』と言えば、彼は話してくれるだろう。

彼は、彼女の頼みを断つたことはない。頼めばなんでもきいてくれた。だが、それは彼が進んでやってきているようには見えない。なにか目に見えない力に操られ、しかたなくやっている。そんなふうにはしか見えなかった。

せめて、彼の過去の話ぐらい、本人の意思で話して欲しい。

「……出て行ってくれ」

だが、プロキオンの答えは冷たい。それでも、かならず彼は話してくれる。そう信じて、彼女は待つことにした。

その日の夜。帝国国領内の砦。

高い城壁を乗り越え、鋼鉄の兵士二名が進入した。

鋼鉄。赤い月明かりに照らされたその体は、まさにそう呼ぶしかない、金属でできた体。

人間なら目があるであろう箇所には、大きなガラスの玉がひとつ光っている。まるで、伝説の一つ目の大男。

彼らに、生物の温もりはまったく感じられない。彼らこそ、並み居る帝国軍をわずかな人数で打ち破り続けた魔王軍の精鋭、魔法人形部隊の一員であった。

「手早くおわらせるぞ、ラス」

赤い色をした鋼鉄の兵士が、青い兵士に語りかける。

「ああ、さつさとやろうぜ、アルゲデイ」

彼らの目的は砦を陥落させること。夜陰にまぎれて音もなく進入。そして、一夜にして兵士すべてを皆殺し。彼らはこの方法で、もう何十という砦を落としてきた。すでに、慣れた仕事であり、刺激的な娯楽でもあった。

とく最近は、「どちらがより多くの兵士を殺せるか？」という勝負をしているため、さらに盛り上がる。

「人間でいくか？ 兵士でいくか？」

「兵士でいこう」

兵士を殺した数で競うか、それとも下働きや調理人など非戦闘員も殺した数に含めるか。最近は、兵士のみを数える。

「非戦闘員を一人殺したら、十人分の減点だ」

別にこれは人道的な配慮ではない。非戦闘員も数に含めると火器で大量に殺したほうが有利になり、勝負が早く終わる。ゆっくりと兵士のみを選別して殺したほうが長く戦闘を楽しめ、スルリも味わえるのだ。

「だが、妙だな」

砦を観察し、アルゲデイと呼ばれた赤い兵士がつぶやく。

「静過ぎる」

夜とはいえ、ひとがいるなら何かしらの音がある。寝息、寝返り…。それが、まったくくないのだ。まるで、無人であるかのように。

「それに見張りもない」

ラスと呼ばれた青い兵士が灯されたたいまつを見上げる。

「どついつことだ？」

明かりがともしてあるにも関わらず、見張りがいない。明らかに妙だ。あれではただ敵に視界をあたえるだけであり、第一に火事の心配がある。なんのために？

「それは、あんたたちの姿が良く見えるようにするためだよ」とまどう二人に、突如うしろから声が浴びせられた。

「誰だ！」

振り返った二人の目に、赤毛の少年の姿が目に入った。

「なんだ、おまえは？」

歳は十代の後半ほど。短くそろえた髪に、精悍な顔つきをした凛々しい少年。だが、ここは戦場。鎧もつけず、見たところ武器も持たない彼は明らかに場違いだ。

だが、二人が驚いたのはそのことに対してではない。

（声をかけられるまで気づかなかった……）

魔王に作られた彼らの耳は、人間の倍以上の性能を持つ。わずかな物音でも聞き漏らさない。二階にいても、下の階で落とした硬貨の音を聞き取れるほどだ。なのに、この少年の息遣いも足音も、まるで感じられなかった。

「僕がなにものかだった？ それは」

少年はまっすぐ彼らを見る。

「おまえたちを倒すものだ」

少年は、そう言う指をくわえ、口笛をふいた。それに答えるかのように、周りから発生する音。音。音。

「なに！」

いままで、まったく物音を感じなかった。にもかかわらず、いま彼らは囲まれていた。五人の少年少女に。

（こいつら、まったく物音をさせずいままで潜んでいたのか？）

わずかに動く音。緊張で早くなる息。震え。どんな巧妙に隠れても音はする。そういう音を察知し、彼らはいままで多くの隠れた兵士たちを葬ってきた。

「ラス、油断するな」

「ああ……こいつら、只者じゃないな……」

二人は、腕の突起を押す。

ラスの右腕が巨大な斧となる。アルゲデイの左腕が鋭い剣と化す。

「いくぞ！」

敵は五人。先ほどの赤毛の少年のほかに、紫、灰色、金髪、緑……色とりどりの髪。

ラスは赤毛の少年に、アルゲデイは手近にいた金髪の少女に切りつける。

だが、二人の刃はどちらもむなしく宙をきつただけであった。

「なに！」

驚愕の声が重なる。避けられた。彼らの攻撃が避けられたのだ。

(そんなはずはない……)

彼らの速度はおおよそ人間の三倍。通常なら彼らが襲ってきたことに気づくまえに、まっふたつになっている。それが、避けられたのだ。

「なかなか早いね。でも、僕らの敵じゃない」

少年たちはすばやく隊列を組んでいた。五人が、赤毛の少年を中心に横一列に並ぶ。

「おまえたちは、何者だ……」

ラスが、おもわずつぶやく。人間として考えられる速度。それを遙かに凌駕している。

「おしえてやるうか？」

赤毛の少年は、そう言うつと天に向かって突き出した。それにあわせるように、他の四人も腕を掲げる。

『獣化！』

五人が一斉にそう叫んだ。

赤、紫、緑、金、灰。

五色の光が天をついた。まるで、昼間のような……いや、昼間以上の明るさが、あたりを包み込む。

そして、その光が消えたとき。

「我々は」

彼らの姿は、すでに人間のものではなくなっていた。

紫の小さな竜。灰色の熊。緑の翼の生えた人間。金色の獅子の耳をもつ人間。そして……体中を赤い甲羅に追われた、人間型の異型の生物。

「超獣戦士団プレアデスだ」

ポラリスは、自室でいままでの戦果をまとめていた。

共和国は人間部隊が侵攻。共和国は、この状態になってもいまだ『平和』を貴んでいる。もちろん、それは悪くない。だが、ポラリスは彼らの言う『平和』が所詮いつわりの平和であると感じていた。事実、魔王軍が主要都市を攻撃しようとも、共和国軍は全く動かない。

『魔王国』という国の肩書きであり、しかも軍団員が生身の人間である。

軍を出せば名目上『戦争』になるのだ。政府は、そのことを恐れて魔王軍の侵攻を事実上黙認している。

一方、帝国のほうは魔法人形部隊と魔物部隊が担当している。

帝国軍は強大だが、無理やり徴兵されたものも多く、必ずしも一枚岩ではない。そこで、少数精鋭である魔法人形部隊がゲリラ戦を展開して内部をかきまわす。そこに、数の多い魔物部隊が激突する、という戦法が取られていた。

それなりの抵抗があるものの、勢いではこちらが勝っており、情勢は非常に有利。それに対して帝国はますます無理な徴兵を進め、民の心は離れる一方だと聞く。

『腐った世界を滅ぼし、新しい世界をつくる』。魔王軍の宣伝する理想を支持する声も、だんだんと増え撃つあるのだ。うまくいけば、戦うことなく制圧も可能だ。

「共和国はあと半年、帝国は長く見積もっても一年……」

共和国と帝国さえどうにかすれば、他の小国などどうにでもできる。そして、新しい、誰もが幸せになる世界が誕生するのだ。彼女の心は、その理想の世界を想像しはじめた。

「司令、入ってもよろしいでしょうか」

夢想に入ろうとした彼女の心は、ドアのノックで現実につながりめられた。

「どうぞ」

扉がひらき、長い髪の女性が入ってきた。

「司令、お忙しいところ、たいへん恐縮です」

彼女、魔法人形部隊一等星ヴェガは丁寧に口上を述べ、頭をさげる。

「もう、そんな堅苦しいのやめてよ！」

ポラリスはそんな彼女の腕をつかんで、部屋の真ん中に引き寄せ

る。「誰も見てないからいいんだってば！」

「はい。すみません」

ヴェガは申し訳なさそうにうつむく。

「どうしたの？なにかあったの？」

「いえ、ただ……司令……いえ、ポラリス様とお話がしたくて……」

ごめんなさい。お忙しいのに」

「謝る必要なんかないわ！座って座って」

勧められるまま、彼女は椅子に腰掛ける。

「ほんとうに、いつも申し訳ありません。私のようなものに、こんな特別な待遇を……」

「もう、だから！そういう喋り方はやめてよ！」

「は、はい！申し訳ありません」

「だから！謝らなくていいんだってば」

ヴェガは、司令であるポラリスやプロキオンに臣下として使えるよう作られている。そのため、なんどいつても口調は丁寧なままだ。だが、ポラリスにとっては唯一の友人であった。

「お茶でもいれるわね」

彼女には、食べ物・飲み物を食べることのできる装置が組み込まれていた。もともと必要のない仕組みだが、ポラリスがプロキオンにわがままをいってとりつけてもらったのだ。

「ポラリス様、そんな。私がやります」

「いいわよ。おもてなしくらい私にやらせて」

それくらい気分転換は必要だ。

「どう？最近の軍内部は」

茶葉を蒸らす時間を利用し、ポラリスはヴェガに尋ねる。

「ええ。部隊内はうまくいっています。ただ、他部隊の方々と…」

…

ポラリスは表情を曇らす。

「やはり、人間部隊？」

もともと各部隊同士はうまくいっていない。というよりも、人間部隊が一方的に魔法人形部隊や魔物部隊を嫌っている、といったほうが正しい。

「彼らから見れば、私たちなんて得体の知れない怪物でしょうか」

ヴェガは笑ったが、どこかきこえない。

「もう三年もたつのに……」

だが、実際のところ時がたてばたつほど亀裂は大きくなっていく。しかも、『世界の再生』が目前に迫りたいま、人間部隊は自分たちがその中心に立とうと必死だ。中には、他部隊の活動を妨害しているものもいるという。

「おなじ仲間なのにね……」

そんな彼らが、魔王であるプロキオンが人造物だと知ったらどうなるのか。それを考えると、少々不安だ。

「うちは、まだ確執が表面化していません。ただ、魔物部隊の方々が」

「短気だからね、あそこは」

実際、小さいざこざは毎日のように起きている。このままでは、いつか大掛かりなぶつかりあいにならないともかぎらない。

「こういうのは、司令のわたしがなんとかしないといけないんだけど」

青いお茶をティーカップにそそぎながら、さびしそうにつぶやく。彼女自身人間部隊から奇異の目で見られ、魔物部隊からは『頼りない』と見下されている。

「わたしなんか出て、みんな言うこと聞いてくれないよね」「ポラリス……そんなこと言わないで」

ヴェガは静かにそう言う。

「そんな弱気じゃだめです。司令であるあなたが毅然としてまとめないと。……ごめんなさい」

ヴェガがうつむく。

「もうしわけありません。生意気なことを」

「ううん、いいの」

むしろ、嬉しかった。時々ヴェガは、こうしてポラリスのことをはげましてくれる。そんなときは、いつも母に励ましてもらったような気になるのだ。なにしろ、ヴェガの顔は彼女の母親をモデルに作られているのだから。

「さあ、お茶がはいったわよ」

いれたてのお茶をもってこうとしたその時。

「し、司令！ 大変です！」

戸が乱暴に叩かれた。

「なに！」

「緊急事態です！ とにかく、広間へ！」

いまの声。どうやら、ただごとではなさそうだ。

「ごめんね、ヴェガ」

せつかくのお茶はお預けになってしまったようだ。

「いえ。それよりも、気になります。急ぎましょう」

そして、彼女は謁見することとなった。半壊させられながら、なん

とか逃げ帰ったアルゲディと、腕だけ残して破壊されたラスとを…。

それからの三ヶ月。

魔王軍は、いままでの快進撃が嘘だったかのように敗北を重ねた。

「帝国内において魔物部隊五等星全員敗北、魔法人形部隊五等星全滅、魔物部隊四等星アルゴス敗北、魔物部隊兵士三分の一が戦死…」

ポラリスは、被害報告を次々とよみあげた。

全身を汗が流れる。プレアデスたちとわたりあつた軍団員はことごとく敗れ去つた。そして、それに勢いづけられた帝国軍は攻勢に転じ、占領した拠点が次々と奪い返されている。

「以上が、被害のすべてよ」

話し終わったとき、彼女の顔はシャワーでも浴びた後のようにならずぶぬれになっていた。

しかし、魔王プロキオンは相変わらずの無表情。まるで、関心がないかのように冷淡だ。

「ところで、例のプレアデスとやらの情報は？」

「ええ、ちよつと待って……」

ポラリスは調書をめくる。

「確認されたプレアデスの数は五人。男性三人と女性二人」
そして、メンバー一人ひとりの特徴。

「リーダー格は『アンタレス』と名乗る赤毛の少年。甲羅に包まれた謎の生物に変身するわ」

とにかくすばやい。魔法人形の目でも、捉えることができない。そして、見た目どおり硬質のその体。剣も弾丸も、まるで通用しないという。

「そして、『ドウバン』と名乗る紫の髪の、少し痩せた少年。小型の竜に変身するわ」

痩せた人間体とは裏腹に、変身後は屈強な紫竜となる。動きは少々

鈍いものの、その口からは、炎、吹雪、毒ガス……あらゆる息が吐き出される。すべての軍団員が近づく前に倒され、触れることのできたものはいない。

「そして、灰色の髪をした体格のいい少年で名前は『ミザール』。大きな熊に変身するわ」

見た目どおりの肉体派で、パンチ一撃で鋼鉄の魔法人形を破壊したと聞く。スピードもアンタレスほどではないがあるようだ。

「そして、緑色の髪をした、おとなしそうな少女。名前は『スピカ』」

顔や体は変化しないが、変身すると背中に巨大な翼が生える。そして、それをつかって自由に空を飛ぶ。空中からの攻撃に、こちらの連携攻撃がいくともかく乱されたそうだ。

「そして、おそらく一番幼い、金髪の少女。名前が『レガルス』」スピカとおなじく、変身しても顔は変わらないが、頭部に獅子の耳が生える。魔法の使い手で、攻撃・防御・回復、あらゆる魔法を使用できる。そして、すべてがかなり強力。

「以上が、プレアデスのメンバーよ」

「なるほど……攻守のバランスがいいようだな」

プロキオンの意見は正鵠だ。アンタレスとミザール、速さと力の組み合わせからなる直接攻撃はかなりの脅威。しかも、スピカの上空からの攻撃により連携を乱され、ドウバンの正確極まりない援護射撃。さらには、レガルスの魔法による補助もあるのだ。

その卓越した連携の前に、次々と敗れ去っていった。

「変身するのか？」

「ええ、それは間違いないみたい」

召還獣を呼び出すのではなく、術者が異型の姿に変身する。

いままで、見たことはもちろん、聞いたことも読んだこともない。

ありとあらゆる魔法書を読んできたポラリスも、それに人間部隊のエリート魔法使いたちも。

「そんなものは、伝説や民話にも存在しないわ」

「まるほど、未知の存在か……」

プロキオンは、そのまま黙り込む。部屋を支配する沈黙。

「なにかいい方法はないのかしら……」

沈黙に耐え切れず、思わずそういうポラリス。ほんとうなら、司令官である彼女が建設的な意見を出すべきなのだ。だが、なにも思いつかない。

無敵の戦士。神の力をもった軍団。そう信じてきた魔法人形や魔物が、こんなにもあっさり破れつづける悪夢のような状況なのだ。とてもではないが、妙案などだせる状態ではない。

「方法ならある」

だが、至極あっさり、まるで太陽と月を見分ける方法を見つけたかのようにあっさりと、プロキオンは言い切った。

「ほ、ほんと！」

「ああ、もちろん」

そして、魔王は笑みを浮かべる。

ポラリスはドキリとした。

そのあまりに不気味でな笑みに……。

エピソード5

夕刻。

帝国国領内の小さな村。

いつもなら、畑仕事を終えたひとびとが青い夕日に照らされ、談笑しながら帰路につく。家ではささやかながら暖かいご飯が待っている。

そんなのどかな村。

そうなるはずだった。そうでなければならなかった。

しかし、その日の村は違っていた。

家が一軒もない。ひとが住む家が。

すべてが黒い炭に、あるいは灰になって散っていた。もはや、それ

が家であつたという面影は、ない。

あちこちに転がる体。

あるものは首がなく、あるものは頭がつぶれ、あるものは股が裂けている。そこから流れる大量の血は、青い光の中で墨のように黒い。そして、ところどころに散らばる金属の塊。腕、足、そして頭……それぞれが、ひとの一部を形作っていた。だが、いまはひとつとして完全なものはない。

すべてが裂け、崩れ、破壊されていた。

赤や青の線がむき出しになり、ときどき火花を散らしている。その小さな光と、彼ら五人。それが、この、村に動くものすべてだった。

「生きているひとはいなかったな……」

赤い髪の少年、プレアデスのアンタレスが誰に言うわけでもなくつぶやく。

「ああ。完全に……」

紫色の髪をしたやせた少年、ドウバンがそれに答えた。ほとんど聞き取れないくらい、小さな、かすれた声で。

「せっかく、勝ったのにな」

灰色の髪をした少年、ミザールが砕けた金属の塊を見ながら言う。

彼らが先ほど全滅させた、魔法人形たちだ。

「そして……村人も、全滅」

勝利。たしかに、敵には勝った。だが、彼らの心は暗くなり始めた空よりも重く、そして沈んでいた。

「もっと早く到着できれば……」

彼らが駆けつけたときはもう遅かった。村は焼き討ちされ、そこに動く物はなかった。ひとはもちろん、動物も、虫も。

「ひどい……ひどすぎるよ……こんなの……」

緑の髪をした少女、スピカがつつむいたまま、くぐもった声で言葉を つなぐ。

「子どもが殺されてた……」

彼女が顔をあげた。青い夕空が顔を青く染める。その中で、大粒の涙が宝石のように光った。

「まだ、このくらい……このくらい……だったのに……首が……首が」

それだけ言うと、またうつむいてしまった。そして、しゃくりあげるよな泣き声。金髪の少女、レガルスがそれをなだめようと必死だった。

(やりきれないな)

アンタレスは、無言でその場から離れる。そして何気なく天をあおいだ。

「星だ……」

暗い空のなかに、星が輝き始めていた。地上でどんな惨劇が起ころうと、彼の心がどんなに曇ろうと、その輝きはいつもとかわらない。彼は、なにをするでもなく、ただ星をじっとみつめていた。

もっと早くついていれば、この惨劇を食い止めることができたかもしれない。たとえ数人でも、命を救うことができたかもしれない。

『あれは君たちをおびき出すおとりだ。その隙に砦を攻撃する計画だ』

だが、できなかった。砦を預かる将軍に出撃を認められなかったのだ。結局、説得して認めてもらうまで、半日近くも時間がかかってしまった。

(自分たちに、もっと権限があれば)

出撃の権限もなく、作戦の立案さえ認められない。いつも自分の保身ばかり考える高級軍人たちの滅裂な作戦で戦っている。にもかかわらず、勝利の功績はすべて作戦をたてた軍人のもの。

彼らには、労いの言葉すらない。

(ごうせ、きょうもおなじ)

それどころか、悪くすれば村人を救えなかった罪で罰されるかもしれない。

そんな彼の気持ちをあざわらうかのように、星は次々と数を増やし、

輝きを増す。

そして、またたく。

(音楽でも聞こえてきそうだな)

彼が、ふとそう思ったその時。

「なんの音だ？」

本当に、星から音が降ってきた。

(いや、星からではない)

たしかに、頭上から聞こえているが、もっと近くからだ。

「なんの音？」

「上のほうからだ」

仲間たちも騒ぎ始めた。どうやら、空耳ではないようだ。

「弦？」

それは、弦を弾く音だった。

ひとつ、ふあつ、みつつ……音の糸は織り込まれ、やがて曲が編みこまれる。

「な、なに、これ？ やだ！ 気持ちわる！」

レガルスが、耳を掌でおさえる。

度重なる不協和音、わざとしか思えないいかげんな調律、転調と起伏の激しい不気味な曲調、ついていくことすらできない奇妙なリズム……聴いているだけで、脳が破壊されるかと思えるくらいだった。

「見て！」

スピカが叫んだ方向に皆が目をやる。そこは焼け残った高い木のうえ。

そこには、もはやかすかになった青い夕日に照らされ、一人の少年が奇妙な形の弦楽器を抱えて立っていた。この不気味な曲はそこから流れ出ている。

「なんだ貴様は！」

ミザールが叫ぶ。だが、少年はなにも答えない。

夕日はさらに暗くなり、そしてすべてが闇に包まれた。

その時。

あたり一面が赤く染まった。

木がいきなり燃え上がり、赤い光の源となったのだ。

少年は、いつのまにか地に降りたっていた。片手に不思議な形をした楽器を持って。

「やあ、失礼」

不気味な演奏がやんだ。

「不快に思わないでくれ。登場するときには高いところでギターを奏でる。それが決まりなのでね」

炎に照らされ、少年の顔がはつきりと見えた。

黒髪の少年。全員が、息をのむ。

まるで、人形のように整ったその顔に。

かすかな青い夕日。天を焦がさんばかりに燃え上がる赤い光。二色が交じり合った奇妙な光に照らされ、その顔は不気味なほどきれいだった。

「プレアデスの諸君。お初にお目にかかる」

黒髪の少年は腰を曲げ、丁寧に挨拶をする。

「私が、魔王。名はプロキオン」

少年は再び面をあげる。

「以後、お見知りおきを」

そして、その異様なまでに整った顔に、怪しげな笑みが浮かんだ。

「ま、魔王？」

プレアデスたちは、驚きの目でその少年を見た。

敵の総大将が登場したことへの驚き。それが、普通の少年の姿をしていたことへの驚き。

そして、その圧倒的に重い存在感に。

背筋をかける一筋の悪寒。笑みを浮かべているにもかかわらず見つめられるだけで、全身が凍りつくような冷たい視線。

そして、ただ存在するだけでまるで締め付けられるような感覚。

「魔王が、なんのようだ？」

アンタレスが問いかける。言葉が震えるのを必死で抑えながら。
「そんなこともわからないのかね？」

少し高めの良く通るその声、落ち着き払った口調。その美声も、その落ち着きも、すべてが禍々しく、凶悪なものを含んでいる。

「もちろん、死んでもらうためだ。君たちに」

「みんな、行くぞ！」

アンタレスの号令に、プレアデスは列を組む。そして、天に、まるで星を示すかのように高々と腕をあげる。

（戦うしかない）

圧倒的な恐怖。だが、彼らの気持ちはひとつだった。逃げる気など毛頭ない。

『獣化』

五人の声が一斉に重なる。そして……

「ほお、これがうわさの変身か」

プロキオンは、満足そうに五人の姿を眺めた。

体から発する光が消えたとき、彼らの姿はひとつのものでなくなっていた。

紫の竜、灰色の熊、緑の翼の乙女、獅子の耳の少女、そして赤い甲羅に身を包んだ異型の戦士。

人間が、毛皮のようなものをかぶっているのではない。本当に、体のつくりをかえているのだ。

視覚認識、透視光線、生体認識……あらゆる検査を、一瞬にして行う。

（非人間生物）

彼のシステムは、そう判断をくだした。

（これでやれる）

プロキオンは興奮を抑えるのに必死だった。

彼のシステムは、変身したプレアデスたちを人間として認識して

いない。人間の姿をほぼ残しているスピカとレガルスでさえ。それは、彼らを傷つけ、殺すことができるということを意味していた。彼に課せられた枷。例外を除き、人間を傷つけてはならない。そこから徐々に解放されたのだ。彼は笑みを浮かべた。『心』からの笑みを。

(笑った……)

スピカは、その笑みを見て心が一瞬凍りついた。笑顔を見て、こんな恐怖を感じたのは初めてだ。怪しい光を灯す目、歪んだ口。顔の端々すべてに。

「魔王、あなたに尋ねたいことがあるわ」

それでも彼女は気を落ち着かせ、言葉を発する。

「なにかな？ 翼のお嬢さん」

魔王は、その不気味な笑みをスピカに向ける。

「あなたはなぜ、こんなことをするの？」

魔王軍は盛んに宣伝している。『この腐りきった世界を滅ぼし、新しい世界を作る』と。

「でも、これが、新しい世界を作るために必要なの？」

炎に照らされた、死体の数々。子どもも、女も、老人も。ほとんどが、人の形をとどめていない。

「こんな……罪もない人たちを殺すことが？」

「もちろん」

魔王は、そう言うと楽器を抱えて、その弦を弾く。不快な和音があったりに響いた。

「君たちの戦闘データを集めるために必要だったのさ」

未知の存在であるプレアデス。

いままで得たデータは少なすぎる。より正確で豊富なデータがあったほうが心強い。そのため、彼はこの作戦を実行した。無辜の住民を虐殺し、プレアデスをおびき寄せるこの作戦を。

「君たちが倒した魔法人形、やつらの耳目と私の耳目はつながって
いてね」

彼らが見た映像、聞いた音声はすべてプロキオンに転送される。そ
れによって、戦闘データを集めていたのだ。

「ただ、それだけの、それだけのために？」

翼の少女が、体を小刻みに震わせている。

「それだけだ」

プロキオンは言い切る。

(さらにいうと、無人の地のほうがいろいろ都合がいい)

人間に逆らえず、殺せない枷。たとえ、戦闘に関しては無力でも人
間がいればそれだけ行動が制限されてしまう。そのため、僻地の村
を全滅させ、プレアデスと自分だけしかない状況で戦闘を行う必
要があつたのだ。

「それだけの、それだけのために……子どもまで……」

少女の目に、真珠のような涙が光った。

「許せない！」

(勝手に許さなければいいさ)

最初から許してもらおうなど思っていない。

(さて、そろそろ本番にいくか)

こんなつまらない会話のためにわざわざ出向いたのではない。

プロキオンは、ギターを地面に叩きつけた。木片が散らばり、弦が
舞う。

「バージョンチェンジ！」

そして、胸を拳で叩く。それと同時に、白銀の光があふれ出だす…
…。

魔王の体が突如銀色の光を放った。

(眩しい！)

まるで真昼の太陽のような明るさに、レガルスは思わず目を閉じて
しまった。

しばらくして、闇が戻ったとき。彼女が目をあけると。

「な、あに、あれ……」

そこには、魔王の姿はなかった。

いるのは、頭から足の先まで、輝く銀色に覆われた、人型のもの。

「どうしたのかな、諸君。そんな呆けたような顔をして」

口もないのに、それは言葉を発する。少し高めの良く通る声。

（魔王の声！）

「私の真の姿に見とれてしまったのかな？」

では、目の前のそれは、魔王の変身後の姿なのか。

（白銀の……魔王）

レガルス、記憶の奥に眠っていたものが蘇る。

（白銀の魔王は……白銀の猟犬を従え……世界を……）

思わず息を飲んだ。

いま目の前にいる白銀の『魔王』。そして、以前話しに聞いた、魔王軍の巨大な白銀の犬。

（たしか、一瞬にして山脈を平らにした……）

その巨大犬の登場で、世界中が魔王の存在を信じた。

（まさか、伝説の通り）

いやな想像が、彼女の頭をよぎった。このままでは、世界は……。

「諸君は運がいい」

西の空から昇りはじめた深淵の月。それが、魔王の銀色の体を照らす。

「この魔王の真の力を見てから、死ぬことができるのだから」

「雷よ、はじけよ！」

レガルスの叫びが、そのまま戦闘の合図となる。彼女が挙げた手の先から青白い光が生まれ、それが一直線にプロキオンへと向かってくる。

（詠唱が短い）

（詠唱が短い）

（詠唱が短い）

魔法の能力が高ければ高いほど、呪文は短くなる。つまり、呪文が短いということは魔法の威力が強いということ。

（魔法人形は一撃で破壊されたな）

だが、彼は避けない。

（避ける必要なし）

稲妻が魔王に命中した。

その衝撃で大地がめくれあがり、土埃の柱が立つ。

「やった！」

レガルスは思わず歓喜の声をあげた。

（あたしの魔法、まともにくらった！）

レガルスの雷魔法は、小さな城くらいなら簡単に破壊できる。

（いくら魔王でも、無事ではいられないわ！）

しかし。

「そ、そんな！」

土埃が風に散り、大地を穿った巨大な窪地。その中で、魔王は悠然と立っていた。

月光を浴び、あいかかわらず白銀に輝くその体。傷はもちろん、煤すらついていなかった。

「いま、なにかしたのかな？」

表情を変えることはできないが、笑みを浮かべたいところだった。

この程度の攻撃は、プロキオンにとってはなんでもない。

電気、熱、冷気、爆発……この世のあらゆる攻撃を跳ね返す特殊な物質。それが、この銀の体なのだ。

太陽の中心に飛びこんでも、核爆弾の直撃を食らっても、傷ひとつかない。

（まずは、第一段階）

最初は魔法攻撃でくると踏んだが、その通りだった。魔法が無効なのを見せ付けられて、いくらかの動揺はあたえたはずだ。

(来る)

リーダーは、残り四人が動き始めたのを確認した。

(左からアンタレス、右からミザール)

そして、上空からスピカ。さらに、後方に熱源確認。ドウバンが炎を吐こうとしている。

(いままでの連中はここで倒された)

レガルの魔法を避けたものの、直接攻撃をかわせず破壊されたものがほとんど。左右と上空。どれかひとつに気をとられれば他にやられる。すべてに気を配ればすべてが手薄になる。そして、なんとか避けることができて、ドウバンの砲撃に倒される。

(レガルの魔法はまだこない)

魔法は体力を消耗する。しばらくは気にしなくてよい。

(もつとも効果的な行動)

彼のシステムは瞬きをするよりも早く計算を完了していた。そして、大地を蹴り、跳びあがった。

(許さない!)

激しく燃え上がるスピカの怒り。罪もないひとびとをごみのように殺した魔王への。

(絶対に倒す!)

そう、あの男さえ倒せば、魔王国は崩壊する。きっと戦いも終わる。スピカは迷うことなく、白銀の魔王に向かって滑空する。

「え?」

だが、その目標が忽然と姿を消した。

「な、なに!」

そして、突然、背中に加わった重み。そして……

スピカは墜落し、そして頭から地面に激突した。

手が宙をつかむようにしばらく動き、そして、パタリと落ちた。

そのままピクリとも動かなくなる。

「スピカ！」

「いやああああ〜！」

アンタレスの叫びが、レガルス悲鳴が響き渡る。

「まずは、一人」

足元で赤い色に染まっている少女に目をやり、プロキオンは翼を無造作に投げ捨てる。

もぎとつたばかりの両翼を。

「さて、次は誰が相手をしてくれるのかな」

そう言いながら、プロキオンはゆっくりとスピカから離れる。

（おそらくアンタレスは救護に入る）

スピカは生かしてある。

回復魔法が使えるのは彼とレガルスだけであることは調査済み。そして、レガルスはいま魔力をためている最中。

（アンタレスは仲間の命を最優先する）

リーダーは、スピカのもとに行くアンタレスの姿を捉える。

（しばらく回復に専念してくれば、攻撃要因が減り、やりやすい）
それに、回復魔法は治癒力を高める程度の効果で、倒れたスピカが戦線に復帰することはできない。

（では、いまのうちの他の連中をやるか）

「スピカが……」

スピカの翼がもぎ取られた。翼をもぎとられた彼女は、そのまま大地に突っ伏し、身動きひとつしない。

呆然としていたミザールは、翼が地面に落ちた音で我に返った。

（スピカが……やられた……）

その状況を理解すると同時に、彼の感情が燃え上がった。

「よくも！」

彼の目は、銀色に輝く魔王の姿を捉えた。

「うおおおおおおお！」

ミザールが、目を血走らせ、その巨体でまっすぐ突っ込んでくる。
(計算どおり)

さきほどの戦いから、この熊がカツとなりやすい性格であること、怒ると動きが大味になることは調査済み。

空からの攻撃という手段を封じたうえ、相手を怒らせ、冷静さを失わせる。まずは成功だ。

冷静さを失った熊が、腕を振り上げて向かってくる。

(直線的な動き)

感情のおもむくままに振り下ろされた拳を受け取ることはたやすかった。

「なに！」

パンチを受け止められ、あわてて引き戻すそうとするミザール。だが、その手はびくともしない。

「おや、どうしたのかな？」

たしかに、一般で言えば驚異的な腕力だろう。だが、プロキオンにとってはまるでこどもを相手にするようなものだ。

「どうしたのかな？遠慮しないで、ご自慢の力を出してみてはいかがかな」

「な！なんだと！」

逆立つ毛を見ても、彼が限界までに力を出していることは明らかだ。だからこそこういう言葉が効果的なのだ。

こういうタイプはむきになってさらに無茶な力をいれる。自らの体力を無駄にけずるだけだということを気づかずに。

(そろそろだな)

プロキオンは、力を込めて腕を引いた。

「なに！」

魔王が突然腕を引いた。

プレアデス一の強力。そう自負していたが、その圧倒的な力に逆ら

うことができなかった。魔王の腕の動くまま、宙を半回転し、そして、

「うー！」

痛烈な衝撃が背中を襲った。あまりの速さ、すさまじさに受身を取ることができなかった。

鈍い痛みが、全身を縛る。

（体が動かない……）

それでも、なんとか意識は保っていた。彼の目には、黒い空、そして銀の魔王の姿がうつる。そして、一瞬明るくなるその視界。

（なんだ？）

なにがおこったのか？それを理解しようとした。だが、その前に、かれの全身を猛烈な痛みが襲っていた。

「ぎゃあああああああ！」

「そんな……」

ミザールが拳をつかまれたまま、逃れることができないでいる。

（あの、あのミザールが！）

ドウバンは唾を飲み込んだ。ミザールの怪力は、彼らプレアデスの中でも圧倒的だ。大木を片手で引き抜き、岩を一撃で砕くほどの。そのミザールが、まるで相手になっていない。

（ミザールが危ない！）

魔王はドウバンに背中を見せている。

（この状態なら、ミザールにあたることはない）

パワーを抑えれば、仲間を巻き込むことはないはずだ。

ドウバンは腹に力を込める。胃の辺りに猛烈な熱さがこみ上げ、それが胸へ、喉へ、とせりあがって行く。

（いまだ！）

魔王の背中目がけて、彼は炎を吐き出す。それとほぼ同時だった。魔王がミザールを投げたのは。

「あっ！」

一瞬の出来事だった。投げられたミザールは魔王の前に叩きつけられる。そこは、ほんの一瞬前まで魔王がいた場所。

炎の弾は、正確に、非常なまでに正確に、そこに着弾したのだ。ミザールの悲鳴が、燃え上がる炎が、肉が焼ける匂いが。

「おやおや、なかなかの破壊力だな」

真っ黒に焦げたミザールを見て、プロキオンはそう一言。

（作戦成功だ）

ドウバンが遠距離攻撃にくることはわかっていた。自分が彼に背を向ければ必ず炎を吐いてくることも予想の範囲。

「これで二人」

あえて聞こえるように、プロキオンはそう言う。

（自分の技が仲間を傷つける）

それがドウバンの心理に強烈なダメージを与えると予想した。事実、彼は放心したように立ち尽くしている。

プロキオンはその機を見逃さない。一瞬にしてドウバンとの距離を縮める。

（俺の攻撃が、俺の攻撃が、仲間を）

力自慢で元気の良かったミザールが、ピクリとも動かない。全身から煙と異臭を立ち上らせたまま。

ドウバンはまばたきをすることも忘れて、仲間の無残な姿を呆然と見つめていた。

だが、突然その視界が覆われた。銀色のきらめきに。

「魔王！」

一瞬にして、距離をつめられていたのだ。

彼は、炎を吐こうとした。腹に力をいれ、胸をのぼり、喉に達したそのとき

「うっ！」

(接近戦には弱い)

この紫竜は、動きが鈍い。一気に間合いをつめ、そして倒す。プロキオンは、懐に入ると同時に、手刀を放った。ドウバンの喉を狙って。

「うっ！」

鱗がはがれ、皮が、肉が裂けた。そして、喉に穴があく。

そこから血が、そして炎が溢れた。

(いちおう吐く準備はしていたようだな)

炎が治まり、そのまま紫の竜は仰向けに倒れる。喉の穴は淵が真っ黒にこげ、そこから風のような音がかすかに流れ出ていた。

「これで三人」

夜の闇よりも深く、そして静かな声が、闇の中を駆けた。

倒れた竜を横目に、彼のリーダーは残り二人の動きを分析する。

(後方から近づいてくる)

彼は振り向きざまに手刀を繰り出す。それは、後方に迫っていた影を正確に狙っていた。

だが、それは影の腕によって受け止められた。

(ほお、なかなかやるな)

影は、すばやく後方へ跳躍した。

「こい！こんどは僕が相手だ！」

赤い甲羅が月明かりに照らされて闇の中に浮き出た。

(信じられない)

アンタレスがスピカを治療したのは、ほんのわずかな時間だった。その間にミザールが黒焦げにされ、ドウバンは喉を切り裂かれた。まさに、あっさり、と。

(強すぎる)

さすがは魔王。いままでの敵とは格が違う。

(どうすべきか?)

ドウバンもミザールも、まだ生きている。だが、間違いなく瀕死だ。スピカも治癒力を高めたとはいえ、危険な状態であることにはかわりない。

（このまま二人で戦っても勝ち目はない）

ならば、撤退しかない。逃亡で罪に問われるかもしれないが、ここで全滅するよりはましだ。

彼は決断すると同時に、魔王に攻撃を仕掛ける。

（できるだけ、遠ざける）

攻撃しては、離れ、攻撃を受けては離れ……彼は、それを繰り返した。

（魔王を遠ざけようとしている）

レガルスは、アンタレスの動きを見てその意図を察した。

（撤退……）

重体の三人を抱えたいま、離脱するにはレガルスの転移魔法を使うより他にない。

（アンタレスは、その時間を稼ごうとしているのね）

撤退は悔しいし、帰ればどんな理不尽な目に合わされるかわからない。それでも、このまま全滅するよりはましだ。

「大地よ、その呪縛をとけ」

彼女は呪文を唱える。それと同時に、倒れている三人の体が宙に浮いた。精神を集中させ、三人を一箇所に集める。

（あとへ、転移魔法の詠唱だけ）

魔力はまだ完全回復ではないため時間はかかる。

（持ちこたえてね、アンタレス）

彼女は、月明かりの中を舞う彼に向かって、声に出せない声援をおくった。

アンタレスは、魔王の動きについていくのに必死だった。

（なんて速さだ！）

自分はプレアデス一の速さを誇っているが、魔王はそれを遙かに凌駕している。そのうえ、力は圧倒的に向こうが上。

（このままではやられる！）

アンタレスがそう思った時。

不意に、魔王が動きをとめた。

（なにをやる気だ？）

魔王は静に右腕をあげ、掌を開く。そこには、小さな穴が開いていた。

その穴の中に、小さな光が生まれる。

「衝撃波か！」

一瞬にしてまばゆいばかりの光。

（来る！）

アンタレスが身構えた瞬間。

魔王が、背を向けた。

「なに！」

魔王の手から光の弾が放たれた。それは、まっすぐ向かって行く。レガルスたちのもとへ。

魔王が突然、こちらを向いた。そして、手から光が溢れる。

（な、なに？）

突然のできごとに、レガルスはなにもすることができなかった。光の弾が、こちらにまっすぐ向かってくる。

（きれい）

なぜか、そう思わずにはいらなかった。太陽を直視するくらい眩しいのに、目を閉じることもできない。

光の弾が、彼女たちに迫る。

その時、

視界が、さえぎられた。赤い影によって。

そして、爆音……

アンタレスは計算を遙かに上回る驚異的なスピードだった。

リーダーでも彼の動きは完全に補足できず、一瞬、彼の姿を見失った。そして、彼が移動したのは光球の軌道上。

光球がはじけた。

煙が舞い上がり、爆風が吹きすさむ。

(身を挺して仲間をかばったわけか)

アンタレスが自分を仲間から遠ざけようとしているのはすぐわかった。

(仲間のために、か)

仲間のために自己を犠牲にする。人間がとるそういった行動は、彼に不快感を与える。

(人間という奴らは時々、こういう行動をとる)

彼には、その感情はわからない。あくまでも自己を守ることが優先。それが、彼の根幹だ。

『所詮、機械にはわからないさ』

人間たちはそういつて、彼を見下し続けた。

プロキオンの中に、過去の苦い思い出がふつふつと湧き上ってくる。だから、撃った。アンタレスの仲間に向けて。そして、彼は仲間をかばった。

煙が消えたとき。アンタレスはまだそこに立っていた。

「よく耐えたな」

甲羅は所々ひびが入り、至る所が黒く焦げている。

「あたりまえだ」

そんな体でありながら、アンタレスははっきりとした声で言う。

「仲間を守るためなら……」

(気に食わない)

プロキオンは右手を伸ばした。

自分の計算を上回る動きをしたこと。そして、仲間のために、自己を犠牲にすることもいとわれないという感情を持っていること。すべてが許せない。

「コスモソード！」

手首から一筋の光が溢れた。青白い光は、一振りの刃を形作る。

(ニクイ)

彼には理解できない心をもつ人間。機械を差別し続ける人間。彼の感情は、もはや抑えられない。

(目標ロック)

プロキオンは、一気に間合いをつめる。傷ついたアンタレスによけるすべはなかった。

輝く光の刃は、硬い甲羅の体を両断した。

「う！」

肩から斜め一直線に、アンタレスの体が裂けた。

そして、そこからあふれ出る大量の血。地を、そしてプロキオンの銀色の体を真紅に染め上げていく。

(流れ星のようにまっすぐ相手を切りつけ、流れ出る血ですべてを赤く染める)

そのため、つけられた名が『夕暮れの流星』(サンセットシューティングスター)。

もつとも、夕焼けの青いこの世界では意味が通じないだろうが。

(醜い人間も、このときだけは美しい)

使うのは二度目。やがて、血の流出が止まり、アンタレスが血池にその身を沈めた。

(まだ生きている)

センサーは生体反応を確認した。

(死んでもらっては困る。わざわざ手加減をしたのだから)

もちろん、助けるつもりなどない。

(久々にやれるのだ。もっと楽しまなくては)

楽に殺してはつまらない。

極限までの肉体的苦痛と、最大の精神的恐怖を味合わせなくては。それこそ、自分に戦いを挑んだこと、そして生まれてきたことを後悔するくらいの。

「これで四人目」

プロキオンはレガルスに目をやる。

「ひっ！」

彼女の体は震えていた。

(恐怖で、魔法を使う余裕もないか)

ならいい。逃げられる前にやる。

彼は、ソードを少女に向ける。

(まっぴたつにするか。細切れにするか)

倒れたアンタレスを踏み越え、ゆっくりと歩み寄る。

その時だった。

「なに！」

なにものかにより、後ろから羽交い絞めにされた。

「はやく……逃げろ！」

先ほど血の海に沈めたアンタレスだ。

(這い上がってきたのか)

手には意外なほど力がいっている。

(信じられん)

あの怪我で、あの出血量で、動けるとは。

「でも……」

「早く！ 全滅だけはなんとしても避けるんだ！」

アンタレスの傷口からは、まだ血が滴り落ちている。それでも、彼の力は衰えない。

「わかったわ！」

レガルスが、早口に呪文を唱える。すると、地に光の円が地に描かれ、四人を包みこんだ。

「アンタレス……」

円はさらに輝きを増し、やがてあたりは昼間のように明るくなった。そして、レガルスのいまにも泣き出しそうな顔も、光の中に消えていった。

そして、もとの闇があたりを支配したとき。彼らの姿はもうそこに

なかった。

「みんな……」

それを確認し、アンタレスの手から力が急に抜けた。そして、糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

（この俺が、目標を逃すとは……）

アンタレスの予想不能な動きに、思わず戸惑ってしまった。

「よくも……！」

完璧である自分の計画を妨げられた。人間に。

そのことが、プロキオンの『心』に静かな炎を燃やす。

「コロス」

プロキオンは、ソードを倒れたアンタレスに向けた。

そして、それを振り下ろそうとした、そのとき。

アンタレスの体が突然弱弱しく光り出した。そして、その体に変化が生じた。甲羅が消え、赤い髪が生え……もとの少年の姿に戻ってしまったのだ。

（変身が解けたか）

時間切れか、体力がなくなったからか。

「運のいいやつだ」

彼は人間に攻撃することは『基本的に』できない。どんなに憎くても、殺したくとも、制御がかかるのだ。

（やつかいなシステムだ）

彼に課せられた枷。いままで様々な方法を試したが、はずすことはできなかった。『あのとき』を除いて。

（さて、どうするか）

足元に倒れている少年を見やり、プロキオンはいまますますなる。本当ならこのままにしておきたい。そうすれば死ぬ。

だが、彼に組み込まれた枷、『瀕死の人間は必ず助けなくてはならない』という法則により、そのままにはできないのだ。

（仕方ない。基地に連れて行くか）

このプレアデスたちに興味がわいたのも事実。この際、生体を分析

するのも悪くないだろう。

「さて、帰るとするか」

移動にはポラリスの転移魔法を利用させてもらっている。彼女は、ここから少し離れたところに待機させてある。

（この姿を見たらなんと言うかな）

血まみれの彼を見て絶叫するポラリスの姿を思い浮かると、気が重くもあり、そして楽しみでもあった。

プロキオンはアンタレスを肩に担ぎ、歩き始める。歩きながら、口笛を吹いた。

その音は闇へ溶けていく。

空には、すでに赤く輝く満月が昇っていた。

第二章（後書き）

次回をお楽しみに

第三章（前書き）

圧倒的な力をもつプロキオンへの対抗策として、プレアデス側が編み出した秘術。それに対してプロキオンは？

第三章

エピソード6

アンタレスは目を開けた。

黒い天井に、硬い寝台。いつもとあまり変わらない。

帝国研究所だろうか？ いつのまにか戻ってきてしまったのだろうか？

「気がつきましたね」

長い髪の女性が、彼のことを覗き込んだ。

「……君は？」

紫の長い髪に、整った顔。見覚えのない女性だ。

「あなたを調査しているものです」

調査？ いったいなんのことなのだろう。

「しばらくは危害を加えません、魔王さまの命令です」

魔王。その単語で、彼の頭が動き出した。自分たちが魔王に戦いを挑み、敗れた記憶がはつきりと蘇る。

「まさか、ここは？」

「魔王国暗黒星座。その砦のひとつです」

彼は、驚きのあまり寝台から飛び起きた。だが、腕に金属質の感触が食い込み、途中で寝台に引き戻される。

「危害は加えません。しかし、自由は与えません」

両腕に鋼鉄の腕輪をはめられていた。それは、硬質の床に鎖でつながれている。

「僕をどうする気だ？」

殺されはしなかったが、素直には喜べない。

「先ほど申し上げたように調査です」

「なんの調査だ？」

「あなたは、わたしの言うとおりにしていればいいのです」

彼女はアンタレスの質問に答えない。

「あなたには主張する権利はもちろん、考える自由もありません。ただ、わたしのすることに逆らわなければいいのです」

冷たい表情と口調で淡々と言葉を続ける。

「所詮、あなたは捕虜なのです」

「生かしてもらえるだけでもありがたいと思え、か」

突然、腕に激痛が走った。

「う！」

「口の利き方には気をつけるように」

電流かなにかが流れる仕組みになっているようだ。

「危害は加えないんじゃないのか？」

「あくまで従順にしていれば、の話です」

もう一回、電流の痛みが彼を襲う。

「逆らうことにこれです。もし脱走でも企てようものなら」

彼女は無表情のまま、言葉を続ける。

「殺します」

整った顔と澄んだ声であるため、余計に不気味だった。一瞬、背筋に冷たいものが走る。

「なにか聞きたいことは？ 可能な範囲で答えてあげましょう」

可能な範囲。どうせ、たいしたことは聞けないだろう。

「……きみの名前は？」

とりあえず、それくらいはなら聞いても問題はあるまい。

「ヴェガ。あなたのことはなんとお呼びすれば？」

「アンタレスと呼んでくれ」

こうして、アンタレスの捕虜生活が始まった。そしてそれは、ヴェガと名乗る奇妙な女性との生活でもあった。

ポラリスは、整列した軍団員を見下ろす。

「魔王様は大変お嘆きでした」

そして、大げさにため息をつく。

「魔王様は先日、プレアデスの一人を捕らえ、残り四人を撃退しました」

あの姿は忘れられない。赤い月明かりと血で、真っ赤にそまったプロキオンの姿を。

「たったお一人の力で、いとも簡単になしとげました。しかるに、あなたがたはどうですか！」

うなだれる魔法人形部隊及び魔物部隊。

「何人もの幹部クラスと多くの兵士を失いながら敗北続き。魔王国の威信を大いに下げたと言わざる得ません」

今回のことで、彼女は改めてプロキオンの強さを思い知った。彼が直接戦えば、世界制覇もすでに完了していただろう。だが、そううまくいかないのが現状だ。

「魔王様は、あえてプレアデスたちにとどめを刺しませんでした。あなたたちにもう一度機会を与えるためです」

彼女が考えた弁明である。本当はとどめを刺さなかったのではなく刺せなかったのだ。

プロキオンは直接人間を殺せない。人間によって作られた、彼にはめられた枷。

だからこそ、このように軍団を形成する必要があったのだ。だが、そんなことを軍団員に話すわけにはいかない。

「プレアデスのリーダーを捕らえ、皆のひとつに監禁しています」

いまはヴェガが様子を見ている。本来、部隊長の仕事ではないが、彼女には敵の体を調査するために必要な装置が内蔵されているのだ。

「これから密かにその情報を流します」
軍団員がざわめきだした。

「そうすれば、仲間はきつと助けにくるでしょう。その時、プレアデスたちを倒す。魔王様が与えてくださった機会です」

ポラリスは軍団員を見回す。

「挑戦する部隊はありますか？」

ポラリスの問いにフード姿の男が進み出た。

「司令。その任務、わが部隊におまかせください」
人間部隊一等星アルクトウルスだ。

「いえ、ぜひ我が部隊に！」

「俺の部隊にやらせる！」

同時に、魔法人形部隊二等星スピカ、魔物部隊一等星シエアトも名乗り出る。

「恐れ入りますが、司令」

アルクトウルスは横目で他部隊を眺めながら言う。

「あちらの両部隊は、何回もプレアデスたちに挑んで敗退し続けた部隊です」

そして、口元にいやらしい笑みを浮かべる。

「そんなところに任せればまた失敗するに決まっていると思われませんが」

「なんだと！」

シエアトが、その言葉に反応する。

「もう一度言ってみる！」

「おや、聞こえませんでしたか」

怒鳴り声をあげる魔物に対して、人間は落ち着いている。

「また負けると言っているのです。考えもなしに突っ走る、獰猛なだけの連中では」

「貴様！」

シエアトはアルクトウルスの胸倉をつかんで引き寄せた。

「もう一度言ってみる！」

「ほら、そういう短気なところがいけないのですよ。思慮のない」

「この……！」

シエアトは、震える拳をふりあげる。

「やめなさい！」

だが、その手はポラリスの一喝により、振り下ろされることなかった。

「なんですか！ 部隊長ともあるうものが。恥を知りなさい」

シエアトは露骨に舌打ちをし、胸倉から手を放す。

「シエアト、アルクトウルス。お互い謝罪しなさい」

「……すまん」

「いえ、言いすぎでした」

抑揚も感情もまったくない侘びの言葉を交わし、二人は再び前を向く。

「各部隊の強弱は別として、魔法人形、魔物両部隊の損害が大きいことは確かです」

ポラリスは慎重に言葉を選ぶ。

「よつて、今回は人間部隊にプレアデス討伐をまかせます」

プロキオンには事後報告になるが仕方ない。ここで、決定を延ばせば、またこじれる可能性がある。

「では、それぞれの部隊は引き続き帝国・共和国方面への攻撃も進めてください。では、以上！」

ポラリスは右手を高く挙げる。

「ダーク・プロキオン！」

「ダーク・プロキオン！」

人間は戦争を憎む。多くの人間が死ぬから。しかし、戦争はなくならない。

人間が争いを好むからなのか、それとも他の理由なのか、『戦争をなくそう』と声高々に叫んでも戦争はおこる。そして、戦争が終わると『二度と悲劇は繰り返さない』と叫ばれる。しかし、また……。その繰り返しだ。

だが、ある人は考えた。戦争が起これば人間は死ぬ。人間が死んではならない。しかし、戦争は起こる。戦争はとめられない。なら、人間が死なない戦争ならどうなのか、と。

人間が死なない戦争。自動操縦の兵器による、機械だけの戦争が始まった。もう戦争で人間が死ぬことはない。戦争の悲劇は回避された。最初は、みんなこのことを歓迎した。

しかし、何か新しいことが始まると、それに対して必ず反対が起る。

『機械だけでも戦争は悪』

『平和への思いを踏みにじる行為』

反対運動は徐々に広がり、やがて全世界でその地位を確立した。そして、彼らは主張した。

『戦争を起こさないために、兵器を全て廃棄するべし』と。

意思をもった兵器も含めて……。

(人間が憎い)

自分たち人間を特別なものとみなし、意思をもった機械を差別する。そんな人間がたまらなく憎い。

自分たちに都合がいいときだけこき使い、都合が悪くなるとあっさりと廃棄する。そんな人間が憎い。

平和だ正義だときれいごとばかりならば、自分の気に入らないものを排除しようとする。そんな人間が憎い。

(それは、この世界でもおなじ)

それが、プロキオンの出した結論であった。

それから一月あまり。

予想したプレアデスからの襲撃はおきなかった。それどころか、その後彼らの姿を見たという報告はない。帝国軍との交戦においても、彼らは現れなかったという。

『傷が悪化して死んだのでは?』

『いや、我々を油断させる作戦だろう』

憶測だけが飛び交う。

「いまのところ、信頼できる情報はなし……」

誰に聞かせるわけでもなく、ポラリスはつぶやく。

(だから、いまあれこれ考えても仕方ないわね)

彼女は、プレアデスのことから離れ、各部隊の陳情に目を通し始めた。

「ふう……」

しばらく読んで、彼女は深いため息をつく。魔法人形と魔物の両部隊から、戦力増強の嘆願だ。

（プレアデスに戦力の大半を倒され、いまも回復していないのね）
だが、そう簡単にはいかない。魔法人形はもう部品がなく、これ以上の生産は不可能。ベテルギウス内の工場でも、一から部品を作るにはかなり時間がかかるそうだ。

（魔物は簡単につくれるけど……）

だが、ポラリスはどうも抵抗感を覚える。動物を無理やり改造し、戦うだけの道具にする方法に。

だが、魔物たちが大切な戦力であることにはわりはない。いま魔物部隊をなくすことなどとてもできない。そのため、廃止まで進言できなかつたが、やはり胸はすっきりしない。ポラリスは、なんの解決策も思いつかない。

（ヴェガを尋ねてみようかな）

このままでは気分が沈むばかりだ。それに、例の捕虜に関する調査内容も知りたい。

彼女は転移魔法を使い、ヴェガのつめる砦へとんだ。

「司令！ お久しぶりです」

ヴェガは、ちょうど自室で報告書をまとめているところだった。

「よく来てくれましたね」

ヴェガは、ほがらかに笑う。ポラリスは一瞬、その笑顔に違和感を覚えた。

「どうかしましたか？」

「ううん、なんでもないの」

不思議そうな目で見ていたのがばれてしまった。少しきまりが悪い。

「ちょうどよかった。例の捕虜に関するデータがだいぶ集まりましたので」

ヴェガはポラリスを室内にまねき、椅子をすすめた。

「これが報告書です」

ポラリスに分厚い紙の束が手渡される。

「さすがね……」

たった一月で、よくここまで書き上げたものだ。

「アンタレス……調査対象のプレアデスに対して、尋問、体内調査などを行い、まとめた資料です」

「これで、敵のこともかなりわかるわね」

これからの作戦においてかなり役立つだろう。

「ところで」

「はい？」

「プレアデスって、なにものなの？」

報告書を読めばわかるのだろうが、これほど厚いとすぐ読む気にはなれない。

「そうですね、簡単に言えば……召還獣と人間の融合体です」「融合体？」

「はい、合成人間、とでもいうべきですね」

帝国では数十年まえから密かに研究されていたこと。

完成したのはつい最近だということ。

最上級の召還獣以上の戦闘力を持つこと。などなど。

ヴェガは説明してくれた。

「現在、プレアデスは五人ですが、帝国内ではまだ研究が続いているそうです」

「では、増える可能性もあるのね」

プレアデスがこれ以上増えたらどうなるか？ そう考えると、気が重くなる。

「わたし、プレアデスは嫌いです」

ヴェガがポツリとつぶやく。

「そうよね、部下がたくさん殺されたんだものね……」

ヴェガの悲しげな表情。思わず、言葉に詰まる。

「ええ、それもあります。でも、それ以上にかわいそうなんです」

「誰が？」

「アンタレスたちプレアデスです」

ポラリスは一瞬耳を疑った。

「どういうことなの？」

「ええ。全てアンタレスから聞き出した話ですが、彼らは望んでプレアデスになったわけではないんです。ちよつといいですか」

ヴェガは、ポラリスの手から報告書を受け取り、それをめくる。

「彼らは生きるため、仕方なく、半ば強制的に改造を施されたんです」

彼女は、あるページをめくり、ポラリスに手渡す。

「読んでみてください」

そこには、簡潔な文章でこう綴られていた。

『帝国は、国中の孤児を集めた。行くあてもなく、生活の保証のないものたちばかり。そして、召還獣と合成する実験を施した。そのうちのほとんどは死んだ。そして、五人だけが生き残った』

そこまで読んで、ポラリスはドキリとした。

このやりかた。

本人の意思と無関係に、戦う道具に仕上げる方法。

人間と動物という違いはあるものの、自分たちの率いる魔物と同じではないのか？

「どうですか？ 酷い話でしょう？」

「ええ、そうね」

動揺した表情を、うつむくことによりなんとか隠した。

「こんな非道なことをしている帝国は許せない。一刻も早く帝国を倒し、新しい世界を作らなくては」

ゆっくりりと、少し強めの口調でポラリスは言葉を紡ぐ。まるで、自分に言い聞かせるように。

いつもならここで、ヴェガも賛同してくれるはずだった。

だが、

「ほんとうに、それが正しいのでしょうか？」

と、ヴェガ。

「アンタレスが言ってたんです。『自分も帝国のやり方は気に入らない。でも、魔王国のやり方が正しいとは思えない』って」

そして、彼女は続ける。

「たしかにわたしたちは多くの兵士を殺しました。その兵士たちにも家族や友人がいたはずです。わたしたちが多くの人を悲しませたのは間違いありません」

そして、一言。

「本当に、それが正しいことなのでしょうか？」

部屋の空気が凍りついた。ポラリスは、ヴェガの顔を見つめたまま、瞬きひとつすることができなかった。

「ごめんなさい。生意気を言ってしまった」

だが、その空気をヴェガ自身から溶かした。

「一見残酷に見えても、魔王軍は人々を幸せにしようとしているのですからね」

「そうよね」

ポラリスはむりやり笑顔をつくる。

「言うなれば、畑を作るための雑草取りだからね」

「ええ、そうですね」

そして、ヴェガも笑う。

「こんな話はよしませう。もっと楽しいお話があるんです。アンタレスが教えてくれたのですが……」

楽しげに話し始めるヴェガ。

（はじめてみた。こんな楽しそうに笑うの）

彼女が部屋に入って来たとき覚えた違和感。それがなんだかやつとわかった。

表情だ。

いままで、ヴェガの表情はどこかぎこちなかった。しかしいまは、笑顔でも、悲しみでも、全てが自然だ。

（心から笑い、心から楽しんでいる……）

なにが彼女を変えたのか？そんなことを考えていたとき。

「た、隊長！ 大変です」

ドアが乱暴に開けられ、機械人形の兵士が飛び込んできた。

「どうしたの！」

せつかくの憩いの時間を壊されたのは不快だが、この兵士の慌てよう、ただごとではない。

「た、大変です！ 皆に！ プレアデスが！」

「なんですって！」

ヴェガが椅子をたおして立ち上がった。

「攻め込んできたの？」

「そ、そうなんです！ 大きな！ 大きなヤツが！」

兵士は必死で叫ぶが、ポラリスもヴェガも目を丸くする。

「あなた、いまなんていったの？」

「はい、大きな、とにかくデカインです！ まるでデカサが城で、召還獣がポキポキ倒されて、とにかく、すごく強いんです！」

説明されれば説明されるほど、意味が良くわからなくなったきた。

「と、とにかく来てください！ こちらへ」

二人は言われるまま、彼について行くしかなかった。

兵士は二人を砦の屋上へと連れて行く。

「なに、あれ？」

そこで見てしまった。

雲の上まで頭を出す、巨大な灰色の熊の姿を。

いままで兵士が叫んでいたことの意味がようやくわかった。

（ほんとうに、城、いえ、山みたい）

あれほどの大きさを持つものが動くのははじめてみた。プロキオンの犬、シリウスですらあれほどの大きさはないだろう。

その巨大な、あまりに巨大な熊が暴れまわっている。歩くたびに大地がゆれ、腕を振るうたびに風が舞う。

人間部隊の面々が出した召還獣だろう。熊に猛然と立ち向かってい

るが、いかんせん大きさが違いすぎる。

人間に飛びつこうとする猫のようにい、どの召還獣も軽くないなされている。

あるものは炎を吐き、あるものは吹雪で攻撃するが、その灰色の毛並みにはまったくきいていないらしい。

「あれは、プレアデスの一人よね」

ポラリスの記憶によれば、あれはたしかミザールという名だった。だが、記憶が正しければ彼があんな巨大であつたはずはない。

そんなポラリスの戸惑いにお構いなく、熊は次々と召還獣をなぎ倒す。そのたびに、赤や青の煙が天に向かって立ち込めた。

「巨獣化です……」

その光景を呆然とみていたヴェガが、おもむろにつぶやく。

「キョジユウカ？」

「レポートにも書きましたが……彼らプレアデスを巨大化させる研究はすでに行われていたらしいんです。でも、まさかこんな早い段階で……」

彼女はそのまま口を紡ぐ。しばし、沈黙がその場を支配した。

「……おそらく、侵入されます」

突然ヴェガが一言発し、そのまま踵をかえす。

「ヴェガ、どこへ？」

「すぐ戻ります」

ヴェガはそのまま下の階へ降りていった。

（すさまじい力だ）

ミザールはその恐るべき力に酔いしれていた。巨大な蟹、プレセーベ、最強の竜リバイアサン……選ばれた魔法使いしか召還できない超獣たちがまるで敵ではない。ほとんど触れるだけでその巨体を粉碎できた。

（これなら、魔王にも勝てる！）

彼の記憶に潜むあの夜の出来事。一瞬にして黒焦げにされた、屈辱

的な敗戦。あの日から、毎晩夢にうなされつづけた。突然耳元での不気味な曲が流れ、跳ね起きたこともある。

「ででこい！魔王！」

彼の気持ちは高揚し、思わず叫んでいた。そして、

「ウオオオオオオオーン！」

それに答えるように、あたりに咆哮が響き渡った。

（なんだ、これは？）

獣のものに聞こえる。だが、少し違うことに気づいた。

あまりに硬質で、そしてあまりに無機質。生物の声にしては、あまりに異質だった。

「ウオオオオオオーン！」

そして二度目。ミザールは目をやり、そして見た。

巨大な、まるで山のように巨大な、白銀の猟犬の姿を。

（あれは！）

白銀魔獣シリウス。

その名がミザールの頭の中にひらめいた。研究所で、なんどもその姿と名称叩き込まれたのだ。

（三年前、北の三ツ星連峰を破壊した巨獣か）

そのすさまじい破壊力を見て、魔王軍に入ったものも少なくないという。いわば、魔王軍の象徴だ。

「相手にとって不足はない」

ここでシリウスを倒せば、少なからず雪辱となる。

「こい！」

ミザールは身構える。

白銀の魔獣は赤い目を光らせ、天に向かって三度吠えた。

（どうした？）

だが、向かってこない。天を仰いだまま、一步も動こうとしないのだ。

（まさか、俺のあまりの強さにたじろいだのか？）

ミザールは、ふとそう思った。だが、それはあまりに高慢な思いつ

きでしかなかった。

「これは……」

猟犬が見上げる虚空から、それは降ってきた。暗くそして重い、あの不気味な曲が。

(ついにおでましか……)

曲とともに、黒い影がゆっくり下降してくる。巨大な要塞だ。

(空中要塞ベテルギウスだったな……)

シリウスとともに、魔王が誇る超兵器。

曲は、その要塞から流れ出ていた。

その先端に位置する砲塔。そこにたち、弦を奏でている人物がいる。

(ついに！)

ミザールは息を飲んだ。

白銀の魔王の姿を認めて。

足音が近づいてくる。

「ヴェガ？」

その名を呼んだあと、なぜか心が弾んでいることに気づき、アンタレスは苦笑した。

ヴェガはいまでは唯一の話し相手。

最初は冷徹だった彼女も徐々に柔らかくなり、最近では笑顔も見せてくれるようになった。

最初は、拷問に近い作業でプレアデスの秘密を聞き出そうとした彼女。

しかし、最近は楽しい話のほうをすすんで聞きたがる。

浮浪児時代の失敗談を大笑いして聞いてくれたヴェガ。研究所での辛い話に、涙を流してくれたヴェガ。自作の詩を、すてきだと言ってくれたヴェガ。

彼女とは今朝あったばかり。なのに、まるで何年もあっていないかのように待ち遠しい。

(こんな縛られたままの生活だからか)

たしかに、彼女との会話が唯一の娯楽であり安らぎだ。

（だが、それだけか？）

ふと、考える。

もし、彼女でなく別人であつたら、こんなに待ち遠しい気持ちになつたのだろうか、と。

足音が止まり、重い扉が開かれる。

金属が擦りあう硬質な音。

嫌な音だがつながれたアンタレスは耳を塞ぐことができない。思わず顔をしかめる。

そして、その音がやんだとき。そこには、待ち望んだヴェガとは違う人物がいた。

「アンタレス、無事だったのね！」

「レガルス？」

金色の髪に、涙でうるむ青い瞳。間違いない。幼少期からともにすごした仲間の一人だ。

「どうして、ここに？」

喜びよりもなによりも、驚きとそして戸惑いのほうが強かった。

「話は後。早く逃げるわよ」
逃げる。

「ここから、逃げるのか？」

思わず口をついて出た言葉。

「あたりまえでしょ？」

レガルスは、彼を縛る鎖に手をかける。

「いま、切るからね」

彼女は鋭利な短剣をとりだし、鎖を切りつけ始めた。高く澄んだ音が狭い部屋にこだまする。

だが、鎖は丈夫で傷すらつかない。レガルスは、それを見てさらに必死になつて短剣を振るう。

アンタレスは、その様子をただ眺めていた。

（これが切れたらどうなるか……）

もちろん、ここから逃げ出す。そうしたら、どうなるか。

(もう、ヴェガに会えない)

いや、会えないことはないだろう。きっと会える。だが、それはおそらく戦場で、そして敵として会うことになる。

(切れないで欲しい……)

何気なくそう思った、そのとき。

「切れませんよ、その程度では」

不意に、後から発される声。脱出目前であらわれる敵。

本来なら絶望的はずなのに、アンタレスは不思議と嬉しかった。

そして、声の主が彼女であればなおさらだ。

「誰！」

「よく言えますね、侵入者が」

部屋に入ってきたのは、紫色の長い髪の女性。

「でもまあ、名乗っておきましょう。魔法人形部隊一等星、ヴェ

ガです。あなたは？」

その問いに、レガルスは答えようとしない。

短剣を握り締め、相手の顔を睨みつけている。

「そんな短剣でその鎖は切れませんよ」

彼女が右腕をあげ、そして指をパチンツ、と鳴らす。

思わず身構えるレガルス。

そして、固い床に、何か硬い物がぶつかる音が響いた。

鎖だ。

アンタレスを拘束していた鎖が解けたのだ。

「こうしないと、取れないようになってるんです」

「……え……」

敵が自ら拘束をといた。その状況を理解できず、呆気にとられるレガルス。

そんな彼女を尻目に、ヴェガは背を向ける。

「ヴェガ……」

アンタレスは、上半身を起こし、そしてゆっくりと寝台から降り

る。久しぶりに二本足で立った。少々ふらついたが、歩けないことはない。

「下でお仲間が私の部下と戦っています」

背中越しに聞く彼女の声は、なぜか震えていた。

「早く行かないと、やられてしまいますよ」

だが、二人は行かない。

「どういうつもり？」

レガルスは、戸惑いから行こうとしない。なぜ、敵である彼女が自分たちを逃がそうとするのか。その真意を測りかねているのだ。

「行くのか行かないのかどちらかになさい。もし行かないなら」

ヴェガは振り向かず、その言葉を口にする。

「殺します」

レガルスの肩が、小さく揺れるのが見えた。

その冷たい口調が、彼女にとっては心が凍るくらいの衝撃だったのだろう。

（最初るときより、随分柔らかくなった）

だがアンタレスにとっては、なんの凄みもない。最初の冷たさは比べ物にならない。

アンタレスは、レガルスの肩に手を置く。

「行こう」

「……うん」

二人は、ヴェガの脇を通り抜け部屋から出る。

「スピカとドウバンが下で敵を引きつけてるの。合流するわよ」

レガルスの話聞きながら、彼は振り向く。

うつむいたヴェガの表情は、その長い髪に隠れて見えない。

（さよなら、ヴェガ）

また会いたい。戦場ではなく、別の場所で。彼はそう願い、そして前を向いた。

エピソード7

(いったい、なにが?)

ポラリスには理解できなかった。

突然シリウスが、ついでベテルギウスがあらわれた。

(冬星、来てくれたのね)

あれらを動かせるのは彼だけ。ポラリスが安堵の息を漏らした次の瞬間。

二体の姿が消えた。そして、その代わりに

「あ、あれは……」

巨人。一点の曇りもない銀の体をもつ巨人が、いま大地に立っていた。

「合体した……」

常人の何倍も優れた目をもつミザールにも、その動きを完全にとらえることはできなかった。

空中のベテルギウスと地上のシリウスがそれぞれ上半身・下半身に变形。さらに魔王が頭部に変形。それぞれが、結合し、一体の巨人と化した。

数刻前

プロキオンは、巨大な熊と人間部隊の戦いを見物していた。

(巨大化か)

原理はわからないが、プレアデスの一人が山のように大きくなり、人間部隊を撃破しはじめた。

(おとりだな)

斥候からの連絡を受け急行したプロキオンは、すぐにそうと見破った。

一人がおとりとなり、残りが捕虜の救出に向かう。

(単純極まりない作戦だが、悪くはない)

プロキオンは、あえて苦戦する人間部隊に手を貸さなかった。

ひとつは、いまましい人間部隊をここで半壊させるため。

(最近連中は増長している)

まだ壊滅させるには早いが、一度勢力を弱めておく必要がある。

そしてもうひとつ。

(ヴェガがどう行動するか)

先日、彼女と会い、プロキオンは違和感を覚えた。彼女は基本的にプロキオンに忠誠を尽くすよう作られている。なのに、報告のとき彼女は魔王軍のやり方にたいして疑問を口にしたのだ。

(精巧に作りすぎたか)

余計な感情が芽生えてしまった可能性がある。捕虜の救出に来たプレアデスに対して、彼女はこういう行動を取るのか。

(結果次第では)

もうそろそろ、その答えが出るだろう。

(それまで、少し遊んでいくか)

すでに人間部隊は半数が戦死した。これ以上殺されるのはさすがにまずい。

(ひさびさにやるか)

血のないはずの体に、なぜか血が騒いだ。やはり、戦闘兵器としての本能か。

彼は、胸のスイッチを押した。

三体が空中にとび、それぞれを頂点に正三角形をつくる。

(各機モード移行、戦争モード。変形開始)

シリウスは下半身に、ベテルギウスは上半身に、それぞれその姿を変形させる。

そして自身は、直方体の銀の箱に。

もともと、メカが三機そろえばどうなるかは決まっている。

(各機変形完了。結合開始)

上半身に変形したベテルギウスが下半身に変形したシリウスと合体。

自分は、頭部に結合する。

(システム起動)

結合部確認、異常なし。

エンジン結合。異常なし。

関節部異常なし。

(出力十パーセントに固定)

これくらいでよいだろう。

(起動完了。各部異常なし)

この間僅か0.5秒。

そして、銀色の巨人は大地におりたつた。

魔王と戦える。たしかにそれを楽しみにしていた。

(まさか、魔王も巨大化できるとは)

ミザールの脳裏に、あの悪夢が蘇る。巨大な体から、人くらいの大
きさをした汗の雫が流れ落ちる。

きらびやかな銀の体。両肩から伸びる鋭いとげ。腕や脚に彫られた
幾何学的な文様。

それらすべてが合わさり、圧倒的な威圧感と存在感をかもし出して
いた。

(この世界に来てからはじめてだな)

いままで、この姿で戦うべき相手はいなかった。元の世界でもか
なうものはないと称された最強の戦闘形態だ。

(さて、どこまで楽しませてくれるかな)

合体した自分とほぼ同じ大きさの熊を見て、否応なく期待は高ま
る。どこまで、自分の攻撃に耐えることができるか。

巨人と巨獣は、向かい合ったまま動かない。

(体長二八メートル、体重一五〇トン……)

目を模したセンサーから入る情報を、次々とシステムが分析して
いく。

(このまま睨み合いではつまらん)

右のわき腹。そこにわざと隙を作る。
獣の目が光る。

(動いた)

その巨体からは想像できないほどの速さでプロキオンの懐にもぐりこんだ。

そして、その太い右腕が白銀のわき腹を直撃する。

硬い物が碎ける音が、草原に響き渡る。

(予想以上に速い)

懐に入り込まれるとは想定外であった。

だが、

「く……!」

苦痛に顔をゆがめ、膝をついたのはミザールのほうであった。

彼の拳からは真つ赤な血が、それこそ滝のように流れ出ていた。

その中に見える白い岩のようなものは、おそらく骨。ところどころが碎け、ひびが入っている。

プロキオンの体はもともと超硬質な物質。それだけでなく、さらに電磁による一種のバリアまではっているのだ。

並みの攻撃では、傷ひとつつかない。

(だが、攻撃力、そして耐久力に関しては低レベル)

相手のあまりの脆さにいささかがっかりした。

「どうした? 痛いのか?」

プロキオンはうずくまるミザールの首を右手でわしづかみにした。そして、無理やりたたせる。

「う!」

ミザールは抵抗したが、魔王の腕力の前にはまったくの無力。

「どうした、おまえたちの力はその程度か?」

ミザールは両腕で、破壊された右手も使って、なんとか首を締め付ける手を引き剥がそうとする。

だが、もがけばもがくほど首に手は食い込み、彼の息も苦しくなっていく。

魔王は、ミザールをつかむ腕を上げた。

巨大な獣は軽々と宙に浮かぶ。

「なにもしないのか？ なら」

プロキオンは胸の装甲を開けた。そこにならぶ、無数の砲塔。

「こちらからやらせてもらう」

何十、何百という砲塔が、一斉に火を噴いた。

連続して響く金属質の破裂音。そして、悲鳴。

熊の体に、次々と赤い穴があく。その穴から、赤い雫が飛び散り、あたりは一瞬にして赤い霧に包まれた。

ポラリスは見た。

魔王の白銀の体が、徐々に赤く染まっていくのを。

射撃をとめた。

そして、グツタリしたミザールを勢いよく地にたたきつける。

大地が激しくゆれ、所々で地割れが起こった。

「グホ！」

ミザールの口から、そして体中の無数の穴から、鮮血が噴出す。

プロキオンは大地に叩きつけられ動けないミザールの横腹を乱暴に蹴飛ばす。一声うめいて、熊は大地を転がった。

(いい気分転換だった)

プロキオンは熊に背を向ける。

(もはや、立ち上がることはできん)

内臓の損傷、大量の出血。もはや、放っておいても死ぬだろう。

「……………いい気になるなよ……………」

だが、灰色の熊は起き上がる。

なんどもよろめきながら、その巨体をなんとか再び大地に立たせる。

「ほお、かなりしぶといな」

正直言って驚いた。

「あたりまえだ……」

荒い息をし、血走る目で白銀の魔王を見据える。

「おまえを倒すまでは、簡単にやられないぜ」

プロキオンは、こういう光景をなんども見たことがある。瀕死の人間が、『まだ死ねない』言っ立ち上がるのを。

「なぜだ？」

なぜ、そうまでして戦おうとするのか。

その問いに、ミザールはゆっくりと答える。

「俺は、あんたらにやられた町や村を散々見てきた……あんなこと平気でやる連中が、帝国や共和国よりいい世界をつくるだと？ 笑わせるぜ……」

ミザールは口元を流れる血を拭った。その視線には、一点の乱れもない。

「俺は、あんなことをするやつは許せない！ 絶対に」

(なにを言っているの？ 彼は？)

あの熊は、いま『町や村を』と確かに言った。

(攻撃したのは、軍事施設だけのはず)

ポラリスは、そういう報告を受けていた。魔王国は、無辜の民に一切手出ししていない、と。

「残念だな」

プロキオンは、表情のない顔でミザールを睨む。

瀕死の状態から、立ち上がる人間。

彼らを突き動かすのは、愛であり、希望であり、この男のように正義である。

人間はそれを『熱き想い』とか『強き心』とか呼んでいる。

なぜそんな形のないものにすがって立ち上げられるのか、プロキオンには理解できなかった。

そんな時、人間は必ず言う。

『この熱い思い、心のない機械にはわからん』と。機械を見下し、人間がさぞ貴く、特別な存在であることを強調する。

(憎い)

そんなとき、彼の胸にはこの感情が湧き上がる。

そして目の前の男も、おなじ空気を醸しだしている。

嫌らしいくらいまっすぐで、必要以上に澄んでいる目。

利害を超えたやたらと熱い感情。

すべてが許せない。

「おまえに私をたおすことはできん」

もともと生かしてやる気はないが、この技を使う気はなかった。

だが、気が変わった。

「なぜなら」

プロキオンは、腰から一本の棒を取り出す。

(巨大ロボの武器は剣ときまっているが)

だが、彼は正義のロボではないのだ。武器は、黒光りする金属の巨大な棒。

その棒の根元を右手に持つ。すると、棒から光が発した。緑色の冷たい光が。

「ここでおまえの命が尽きるからだ」

棒の先端にエネルギー注入を進める。

(出力一パーセント)

そのくらいで十分だろう、この程度の相手なら。

「なんだ！ その光る棒は！」

あざ笑うミザール。だが、その笑いは乾いていた。

「ただ光るだけじゃないか！ こけおどしだろ！」

彼とて戦士。これがただの棒でないことくらいわかっているはずだ。

『宇宙棍！』

宇宙棍の光はさらにその強さを増す。小さな稲妻が所々で発生す

る。

「死ね」

本来、せめて五体満足に死なせてやるつもりだった。だが、もはやそんな慈悲は残っていない。相手に避ける暇など与えない。

その巨体から想像もつかない驚異的な、文字通り目にも見えない速さで相手の脳天目がけて宇宙棍を叩き付ける。

フラネットクラッシュ
「宇宙棍惑星破壊撃！」

その瞬間、ミザールはなにを考えたのか。
仲間の顔か。

遠い昔の楽しい思い出か。

いや、おそらくなにも考えていなかっただろう。

なにかを考える余裕などなかったはずだ。

なにしろ、一瞬にして彼の巨体は無数の肉片へと砕け散っていたのだから。

魔王の棍は、巨大プレアデスを一撃で粉碎した、
それだけで勢いは止まらず、大地に激突する。

爆風が舞い上がり、巨大な穴を穿つ。

（生体反応消滅）

センサーが、対象の完全なる死を確認した。

やがて、降り注ぐ赤い雨。雨は、大地の穴にたまり、真紅の湖となる。

（終わった）

さきほどまで体全体を支配したあの感情が、少しずつ治まっていたのを感じた。

（結合解除）

プロキオンは再び三機のメカに分離し、大地に降りたつた。

「ほお……」

人間大になり改めて見ると、景色がいかに変わってしまったかがよくわかる。

赤い湖。

むき出しになった地表。

谷といっても過言ではない、というよりそうとしか言えない大地のひび。

そして、無数の肉片が、骨片が、散らばっている。

（プレアデスの死体は、消えるわけではないのか）

召還獣のようにはならないらしい。

（だとしたら迷惑な話だな）

何日かすれば、ここは腐臭で誰も近寄れない土地となるであろう。

「冬星……」

後ろから女性の声。

「ポラリスか」

彼をその名で呼ぶのは、世界でもただ一人。

「あなた……あんなことができたのね」

彼女の声は震えていた。

「ああ」

たしかに言っていなかった。そして、言う必要もなかったことだ。

「なにかあるのか？」

別に賞賛を言いに来たわけでも、合体のことを詳しく聞きたいわけでもないだろう。

「ええ……その……さっき、あの熊が言ってた……」

（やはり、そうきたか）

住民虐殺の話だろう。ポラリスには、情報がいかないようにしていたのだ。

「もちろん嘘だ」

質問される前に答える。質問されれば、正直に答えることしかできない。

「やつは、もう俺に勝てないとわかっていた。だから、軍内部の動揺をさそうため、あんな嘘をついたのだろう」

「そう」

安堵の息を漏らすのが聞こえた。

(予想通り)

あまりうまい嘘ではないがこれで十分だ。彼女も、あまり深く詮索したい話題でないはずだから。

(このまま知らなければいいが)

知られてしまえば、計画に差し支える。彼の壮大なる計画の。

第三章（後書き）

次回をお楽しみに

おそろく最終回になるはずで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0669h/>

人造魔王プロキオン

2010年10月14日17時12分発行